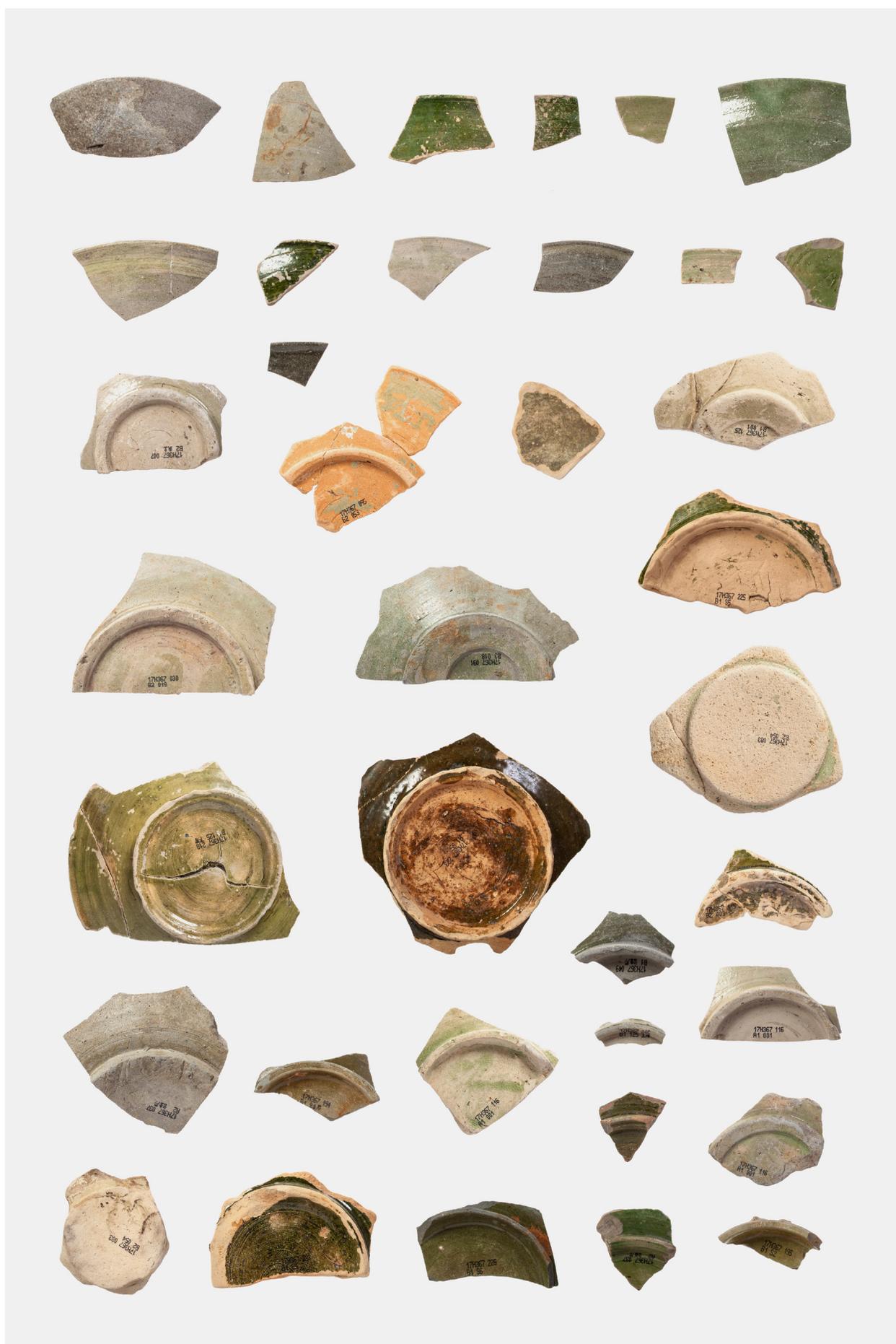


平安京右京四条二坊一町跡

— 壬生上大竹町における埋蔵文化財発掘調査報告書 —

株式会社 イビソク



出土綠釉陶器

例 言

1. 本書は、京都府京都市中京区壬生上大竹町14番1・3・4に所在する平安京右京四条二坊一町跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、文化財保護法93条1項に基づき平成29年9月1日付けで届出された土木工事に伴い、平成29年9月19日に京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が試掘調査を実施した結果、平安京跡に関連する遺構が検出されたため、同課により発掘調査の実施が指示されたものである。[京都市番号17H367]
3. 本調査は、集合住宅建設に伴う事前調査として、株式会社HIKコーポレーションの委託を受けた株式会社イビソクが実施した。
4. 発掘調査は、平成30年2月1日から平成30年2月26日にかけて実施した。
5. 発掘調査は、京都府教育庁指導部文化財保護課、および京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導・助言の下、株式会社イビソクが実施した。
6. 発掘調査は次の体制で行った。

調査主体	株式会社イビソク
調査員	熊谷洋一
計測員	伊藤雅哉
7. 本報告書の編集は熊谷洋一・小池智美が行った。
8. 本報告書の執筆分担は、以下の通りである。

第1章	熊谷	第2章	小池	第3章	熊谷	第4章	小池	第5章	森 政志 (パレオ・ラボ)	第6章	熊谷
-----	----	-----	----	-----	----	-----	----	-----	---------------	-----	----
9. 本報告書では、次に示した地図を調整・使用している。

都市計画基本図 (1:2,500) 「壬生」「山ノ内」京都市都市計画局発行

10. 本報告書で使用している条坊復元図は、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所から座標資料の提供をうけて作成した。
11. 本報告書で示す方位・座標は、国土座標第VI系(世界測地系)、水準値は東京湾平均海水面(T.P.)に基づく数値である。
12. 本報告書に掲載した写真は、遺構写真を熊谷が、遺物写真を横山亮(オフィスメガネ)が撮影した。
13. 報告書作成にあたり下記の方々及び関係機関のご指導、ご協力を得ることができた。

検証委員	伊藤淳史 (京都大学文化財総合研究センター)	(敬称略)
株式会社	パレオ・ラボ	
14. 出土遺物については、関連する図面・写真等の記録類と共に、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課にて保管している。

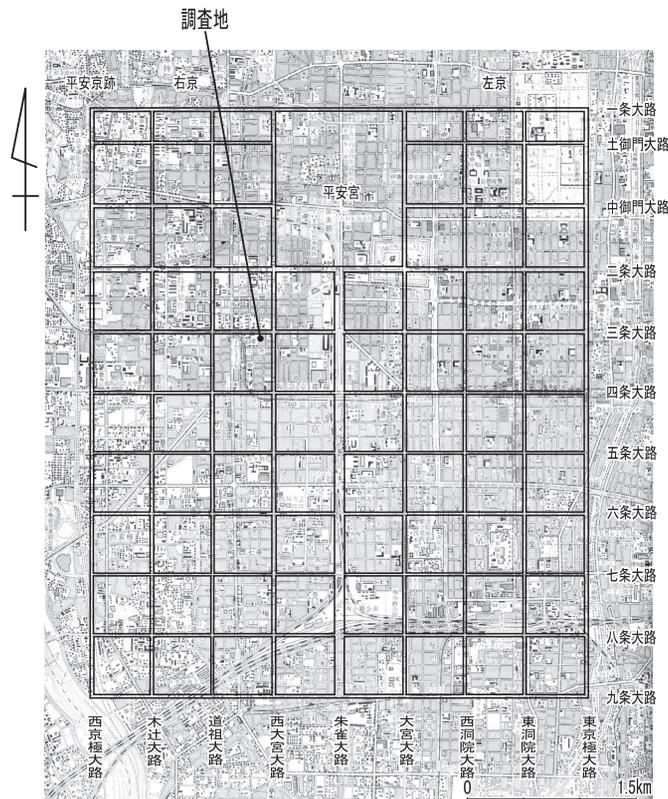
凡 例

1. 遺構・遺物写真の縮尺は任意である。
2. 遺構番号は検出順に割り当てた。その後、編集段階で遺構の性格を付与して表記した。
3. 遺構の計測値は、小数点第2位まで表記した。
4. 表で示した出土遺物の計測値は、残存値に []、復元値に () を付けて表記した。
5. 遺物番号は、遺物実測図・観察表・遺物写真図版にそれぞれ対応している。
6. 本報告書で用いた土色は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を使用した。
7. 出土遺物の年代は、下記の分類・編年を基調とした。
 - ・小森俊寛 2005『京から出土する土器の編年的研究－日本律令的土器様式の成立と展開、7世紀～19世紀－』京都編集工房
 - ・中世土器研究会編 1995『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社

第1表 平安京土器型式一年代対応表

(長岡京)																													
奈良時代		平安時代						鎌倉時代		室町時代				安土桃山時代		江戸時代													
750頃		840頃		930頃		1010頃		1080～90頃		1180頃		1270頃		1360頃		1440頃		1500頃		1580～90頃		1660頃		1740年代頃		1820年代頃			
京都I		京都II		京都III		京都IV		京都V		京都VI		京都VII		京都VIII		京都IX		京都X		京都XI		京都XII		京都XIII		京都XIV			
古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新	古	中	新

(小森2005に基づいて作成)



第1図 平安京復元図と調査地の位置

目 次

卷頭図版	
例言・凡例	
目次・挿図目次・表目次・図版目次	
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の経過	
第2章 位置と環境	3
第3章 遺 構	5
第1節 基本層序	
第2節 遺構の概要	
第3節 遺構	
第4章 遺 物	16
第1節 遺物の概要	
第2節 土器類	
第3節 瓦	
第4節 石製品	
第5章 自然科学分析	24
第6章 まとめ	27
第1節 土地区画関連遺構	
第2節 柱根	
第3節 結び	
出土遺物観察表	30
写真図版	

挿 図 目 次

第1図	平安京復元図と調査地の位置	
第2図	調査地位置図	1
第3図	調査前全景	2
第4図	調査区配置図	2
第5図	周辺調査位置図	3
第6図	四行八門と調査位置関係図	4
第7図	調査区壁面土層図	6
第8図	遺構全体図	7
第9図	溝001・046・125遺構図	9
第10図	柱穴列1・2・3・4遺構図	11
第11図	柱穴列5遺構図	12
第12図	個別遺構図1	13
第13図	個別遺構図2	14
第14図	出土遺物実測図1	17
第15図	出土遺物実測図2	20
第16図	出土丸瓦実測図	22
第17図	出土平瓦実測図	22
第18図	出土石製品実測図	23
第19図	植物珪酸体	25
第20図	植物珪酸体分布図	26

表 目 次

第1表	平安京土器型式—年代対応表	
第2表	周辺調査地一覧	4
第3表	遺構概要表	6
第4表	遺物概要表	16
第5表	分析試料一覧	24
第6表	資料1g当たりのプラント・オパール個数	26
第7表	出土遺物観察表	30

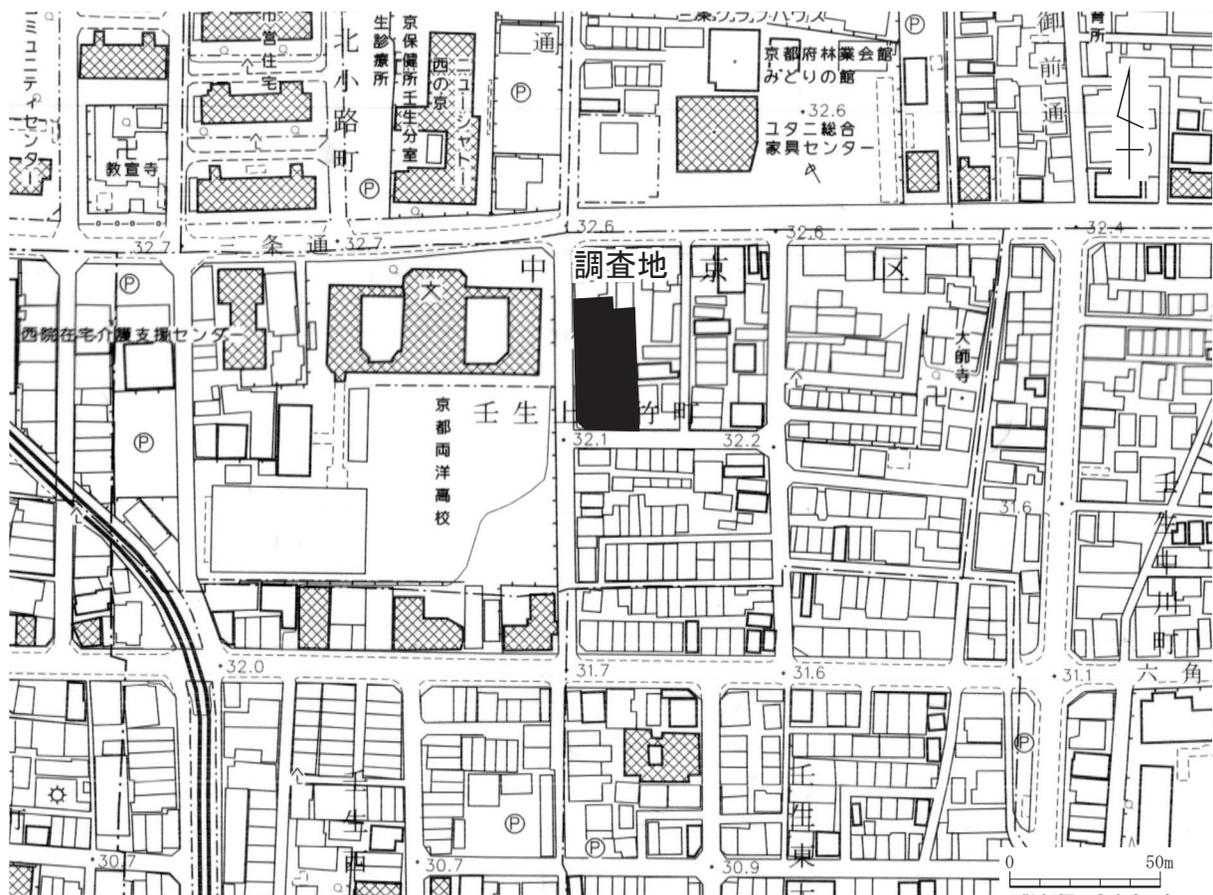
図 版 目 次

- 図版一 1. 調査区全景（北から）
2. 南北ピット群（写真中央）完掘状況（北から）
- 図版二 1. 溝001、046、125完掘状況（北から）
2. 土坑019完掘（東から）
3. 土坑053完掘（西から）
4. 土坑020完掘（北から）
5. 土坑055礫・板材検出状況（西から）
- 図版三 1. 土坑054完掘（南から）
2. 土坑054土層断面（東から）
3. 柱穴列3、柱穴060柱根検出（東から）
4. 柱穴列3、柱穴075礎板瓦検出（北から）
5. 柱穴列5、柱穴013柱根検出（東から）
6. 柱穴列5、柱穴067柱根検出（東から）
7. 柱穴列5、柱穴135柱根検出（北から）
- 図版四 1. 南壁土層（北から）
2. 東壁土層（西から）
3. 北壁土層（南から）
- 図版五 出土遺物1
- 図版六 出土遺物2
- 図版七 出土遺物3
- 図版八 出土遺物4

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

調査は集合住宅建設に伴う発掘調査である。調査地は、京都府京都市中京区壬生上大竹町14番1・3・4に所在する、平安京右京四条二坊一町跡（遺跡番号1）である。当該地において、株式会社HIKコーポレーションにより集合住宅が建設されることになり、同社は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「京都市文化財保護課」という）へ、平成29年9月1日付で文化財保護法第93条第1項に基づく届出を行った。京都市文化財保護課はこれを受け、平成29年9月19日に試掘調査を実施したところ、当該地に平安時代の遺物包含層と遺構が残存していることが確認された（京都市番号17H367）。そのため京都市文化財保護課から発掘調査の指導があり、調査については、株式会社HIKコーポレーションから発掘調査の委託を受けた株式会社イビソクが実施することになった。株式会社イビソクは、文化財保護法第92条に基づき京都府教育委員会に埋蔵文化財発掘調査の届出をし、許可されたので平成30年2月1日より調査を開始した。



第2図 調査地位置図（縮尺 1/2,500）

第2節 調査の経過

発掘調査は、平成30年2月1日から平成30年2月26日まで実施した。京都市文化財保護課の指導・監督の下、試掘調査の結果に基づいて調査区域を設定した（第4図）。調査面積は、105㎡である。バックホウによる近代以降の堆積層の除去作業と並行して、攪乱の掘削を行った。機械掘削後は、地山上面を精査して遺構

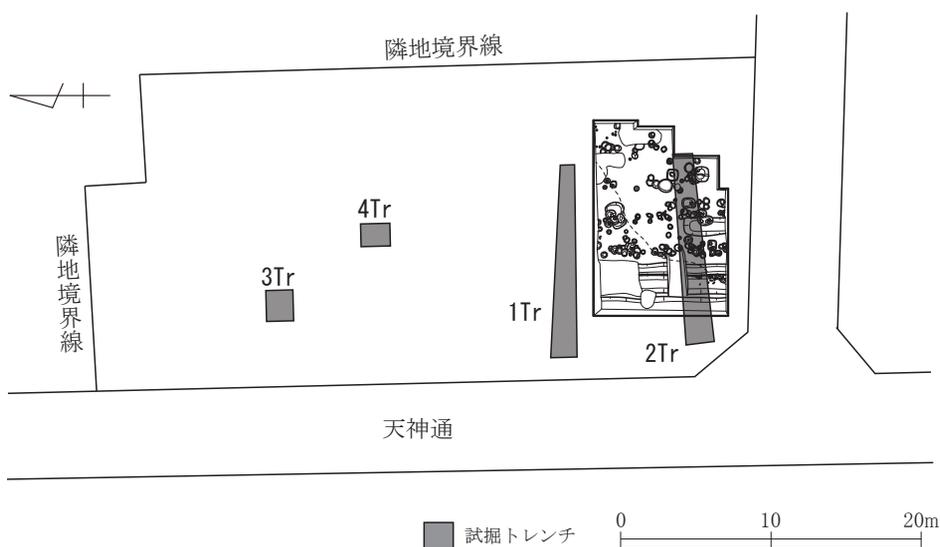


第3図 調査前全景

検出を行った。削平により大半が地山面まで削られていたため調査は1面調査であった。平安時代前期の溝、土坑、柱穴等を確認した。調査終了後に、調査区南壁西部でトレンチを設定し掘削した。その結果、調査面より下層には、遺構・遺物が含まれていないことを確認した。遺構検出時と完掘時には、京都市文化財保護課の検査を受けた。

遺構検出と並行して、遺構配置図を作成し、遺構の配置や重複する遺構の新旧関係の把握に努めた。遺構の記録作業は、土層断面等を基本的に手実測で行い、平面図はトータルステーションを用いて行った。また、土層断面、微細図等は、必要に応じて写真測量を行った。遺構の位置関係把握と遺物の取り上げのため、座標に合わせて東西方向に1～3、南北方向にA～Bの5mグリッドを設定した。遺構番号については、001からの通し番号を付与した。

遺構実測図と遺物実測図は、デジタルトレースを行い、現場計測図面と合わせて編集を行った。編集に伴って各遺構を検討し、遺構の性格付けを行った。出土した遺物は、洗浄、注記、接合の後にランク分けを行い、実測対象検討遺物（Bランク）を抽出した。報告書掲載遺物（Aランク）は掲載順にコンテナに収納し、非掲載遺物（Cランク）は遺構番号順にコンテナに収納した。



第4図 調査区配置図（縮尺 1/500）

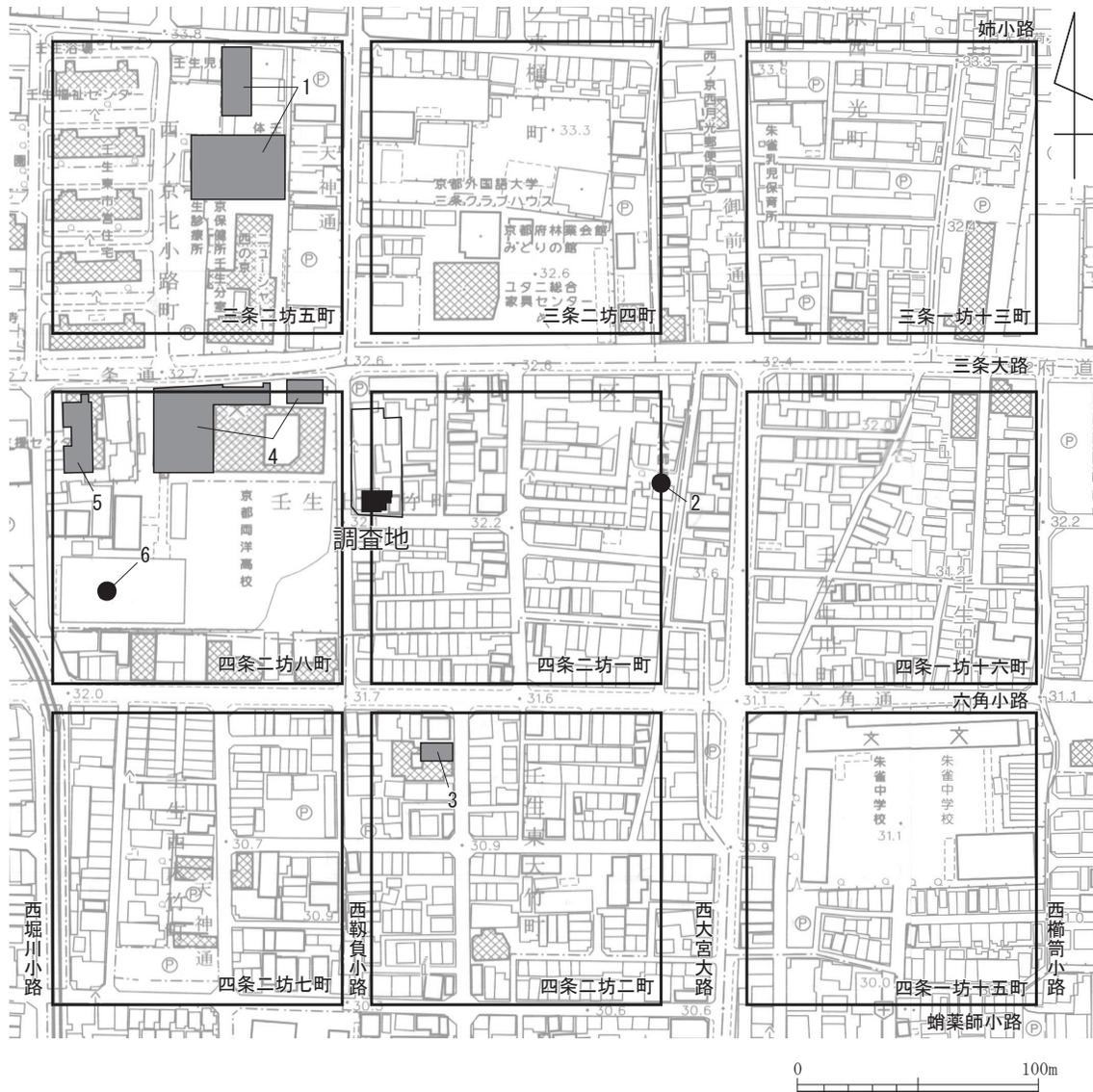
第2章 位置と環境

調査地は京福電鉄西大路三条駅から東へ約 200 m の位置にあり、西は天神通に面しており、三条通の南側に位置する。平安京の条坊では右京四条二坊一町の北西に当たり、調査区内を西鞆負小路東築地芯推定線が通る。四行八門では調査地全体は東四行北一～北四門までの範囲に含まれ、調査区は北三・四門の境界に位置する（第6図）。

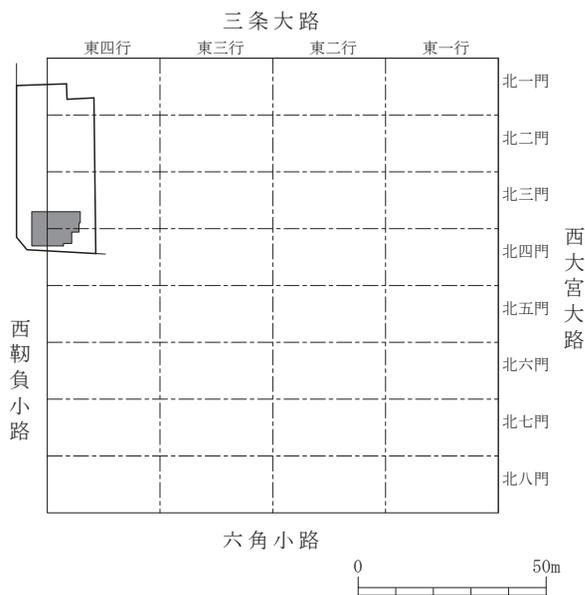
右京四条二坊一町の地は『拾芥抄』西京図には「小泉御厨」と記されており、小泉荘の御厨から発展した荘園であった。

周辺の調査事例は多くはないが、平安時代前半期の条坊関連遺構、掘立柱建物、井戸などが検出されている。またそれ以降の遺構はごくわずかであり、右京の盛衰の歴史と一致している。

今回の調査でも条坊関連遺構、および宅地利用の痕跡の検出が想定された。



第5図 周辺調査位置図 (1 : 3,000)



第6図 四行八門と調査位置関係図（縮尺1：2000）

第2表 周辺調査地一覧

番号	遺跡名	調査	概要	文献
1	三条二坊五町	発掘	平安時代の姉小路南側溝・溝5条・掘立柱建物7棟・柵4条・井戸1基などを検出。	『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
2	四条二坊一町	立会	GL-0.07m、耕作土。	『京都市内遺跡立会調査概報 平成16年度』京都市文化市民局
3	四条二坊二町	発掘	平安時代前期の掘立柱建物4棟・井戸などを検出。	『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所
4	四条二坊八町	発掘	三条大路南側溝・内溝・掘立柱列・掘立柱建物などを検出。	『学校法人 両洋学園内 平安京跡発掘調査報告書』学校法人両洋学園内 平安京跡発掘調査会
5	四条二坊八町	発掘	平安時代前期～中期の三条大路南側溝・築地・内溝・塀・掘立柱建物・井戸などを検出。	『平安京右京内5遺跡 平安京跡研究調査報告第23輯』財団法人古代学協会
6	四条二坊八町	試掘	GL-0.55mにて、包含層、時期不明。	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和59年度』財団法人京都市埋蔵文化財研究所

※番号は、第5図 周辺調査位置図の番号と対応する。

第3章 遺構

第1節 基本層序（第7図）

調査地の現況はほぼ平坦で、地表面の標高は32m前後である。地表面から約60cm下で灰白色シルトの地山面に達する。調査区は、殆どが削平によって地山まで削り込まれた状態であった。東壁の南端、北壁東端、南壁西端において、部分的ではあるが整地層と思われる土層を確認することができた。

東壁

1層は、黄灰色砂泥で約10cmの厚さで堆積する。層上面の標高は約31.8mである。壁面で確認した遺物から近世の層と考えられる。2層は、褐灰色砂泥層で約15cmの厚さで堆積する。層上面の標高は、約31.75mである。3層は、褐灰色砂泥層で約5～10cmの厚さで堆積している。層上面の標高は、約31.65mである。4層は黒褐色粘質土で約15cmの厚さで堆積している。層上面の標高は、約31.6m前後である。I、II層は地山層である。I層は、灰白色シルト層で約10cmの厚さで堆積する。層上面の標高は、31.5m前後である。層状部は、植物遺体化などによるものか黒色化していた。II層は、灰白色シルト層で約40cmの厚さで堆積する。層上面の標高は31.4m前後である。調査区内の大部分は、II層まで削平されていたため、この層の上面で遺構検出を行った。II層は、北壁、及び南壁土層においても同様である。

北壁

北壁の堆積状況は、ほぼ東壁と同様である。1層は、黄灰色砂泥で約6cmの厚さで堆積する。層上面の標高は約31.8mである。2層は、褐灰色砂泥層で約20cmの厚さで堆積する。層上面の標高は約31.75mである。ここでは、東壁3層に対応する層は見られなかった。4層は黒褐色粘質土で約15cmの厚さで堆積する。層上面の標高は約31.6mである。盛土層はここまでの、以下地山層であるI・II層が堆積する。

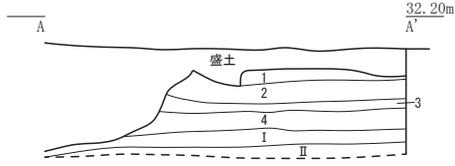
南壁

南壁では、1層～3層が整地と思われる土層である。3層は、その直下で検出した溝001、046、125を覆う形で堆積している。

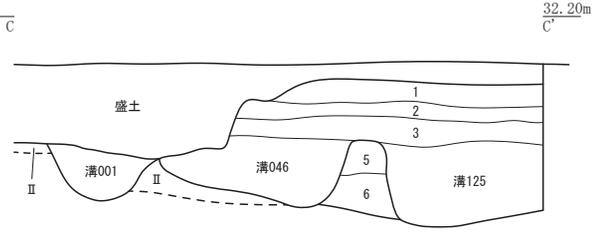
1層は、褐灰色砂泥でマンガンが含まれる。15cm前後の厚さで堆積する。1層上面の標高は、約31.8mである。2層は、褐灰色砂泥で約10cm前後の厚さで堆積する。2層上面の標高は約31.6mである。3層は、褐灰色砂泥で約15cm前後の厚さで堆積している。これら1～3層が溝001、046、125を覆っている。土層断面を観察すると、II層が溝001、046、125の基盤層と考えられる。5層は、灰褐色砂泥で約15cm前後の厚さで堆積する。6層は、灰褐色砂泥層で、約23cm前後の厚さで堆積する。

北、東、南壁面の各層の関連については、土層、標高等で見える限りでは、各1層、2層、3層あるいは、北壁4層と南壁3層が対応すると思われる。

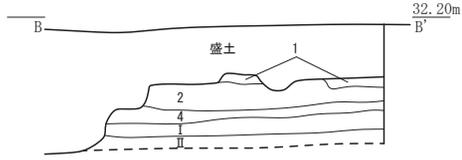
東壁



南壁



北壁



- 1 黄灰色砂泥 炭化物含む しまり有り 粘性弱い
- 2 褐灰色砂泥 小礫やや多く含む マンガン斑多く含む しまり・粘性弱い
- 3 褐灰色砂泥 2層に類似するが色調やや暗くしまり2層よりやや強い
- 4 黒褐色粘質土 マンガン灰白色粘土斑文状に含む 粘性やや強い
- I 灰白色シルト 黒褐色粘土多く混入する しまり・粘性強い(地山)
- II 灰白色シルト 地山

- 1 褐灰色砂泥 小礫・炭化物含む しまり強い 粘性弱い
- 2 褐灰色砂泥 マンガン斑多く含む 小礫やや多く含む しまり有り 粘性弱い
- 3 褐灰色砂泥 マンガン斑多く含む しまり強い 粘性有り
- 5 灰褐色泥砂 黄褐色砂混入する 粘性弱い
- 6 灰褐色砂泥 径10cm大の礫含む しまり弱い
- I 灰白色シルト 黒褐色粘土多く混入する しまり・粘性強い
- II 灰白色シルト 地山



第7図 調査区壁面土層図(縮尺 1/50)

第2節 遺構の概要(第8図)

今回の調査は、ほぼ地山まで削平された状態であったため地山面直上での1面調査であった。

検出した遺構は、144基である。築地芯推定線より西側で、西鞞負小路に関連すると考えられる溝状遺構3条と築地芯推定線上において南北に延びるピット群を検出した。このピット群から4列の柱穴列を確認している。また、東四行北三门と北四門の境界線付近では、柱根を伴い東西に延びる柱穴列を検出した。これ以外では、一部調査区外に延びるため全容は把握できていないが長軸2.75m以上の長方形と思われる大型土坑のほか、土坑や、柱根を伴う柱穴等を検出した。

第3表 遺構概要表

時代	時期	主な遺構
平安時代前期	9世紀後半～10世紀後半	溝、柱穴列、土坑、ピット

第3節 遺構

溝 046 (第9図、図版二)

A1・B1グリッドに位置し、南北方向に走る溝状遺構である。調査区北側では、攪乱によって失われている。規模は、幅1.2m、深さ36cmで、南北に5.8m検出した。断面形状は、箱形を呈する。溝底部の標高は、北側で31.08m、南側で31.06mとほぼ平坦である。

出土した遺物から10世紀半ば～後半(京都Ⅲ期古～新)と考えられる。

溝 001 (第9図、図版二)

A1・B1グリッドに位置し、南北方向に走る溝である。北側A1グリッドでは、その殆どが攪乱によって失われている。西側の溝046と重複関係にあり溝001は、溝046によって西壁上端部が壊されている状況が確認できた。規模は、幅70～77cm、深さ24cm～30cmで、南北に5.8m検出した。断面形状は、半円形を呈する。溝底部の標高は、北側で約31.16m、南側で31.01mで僅かに北から南へ傾斜している。

出土した遺物から9世紀後半～10世紀前半(京都Ⅱ期中～新)と考えられる。

溝 125 (第9図、図版二)

A1・B1グリッドに位置し、南北方向に走る溝状遺構である。溝の方が良好な状態で確認できるのは調査区南側約2m程度で、それより北では攪乱による削平によって底部が僅かに残る程度であった。規模は、幅90cm以上、深さ52cmで南北方向に8.27m検出した。断面形状は残存状況から箱形であると考えられる。土層は、2層に分層しているが大きく見れば1層である。覆土は砂礫層からなるが、2層目は粘土ブロックが含まれている。砂礫が堆積する状況から洪水によって埋没した可能性が考えられる。

砂礫層から出土した遺物から10世紀半ば～後半(京都Ⅲ期古～新)と見られる。

柱穴列1 [柱穴 034・036・138・062] (第10図、図版一)

A1・B1グリッド、西側溝(溝125・046・001)の東側に位置する。主軸方向を南北にとり、築地芯推定線よりやや西に位置する3間以上の柱穴列である。柱間は、約2mである。断面形状は、箱形を呈する。規模は一辺が33～46cm、深さ10cm～20cmで、底面標高は31.2～31.3mである。

出土した遺物から10世紀半ば～後半(京都Ⅲ期古～新)と考えられる。

柱穴列2 [柱穴 078・038・028・081・004] (第10図、図版一)

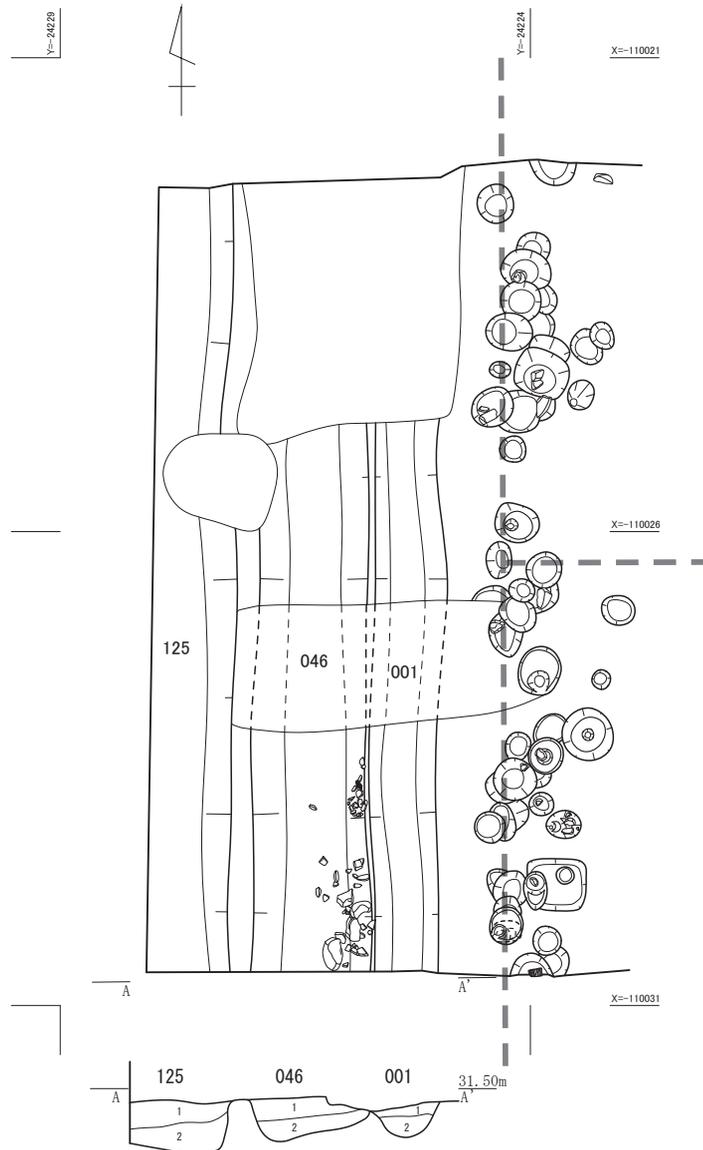
A1・B1グリッド、西側溝(溝125・046・001)の東側に位置する。主軸方向を南北にとり、築地心推定線より約40～50cm東に位置する4間以上の柱穴列である。柱間は、2～2.3mである。断面形状は、箱型を呈する。規模は、一辺が40～45cm、深さは24～42cmを測る。底面標高は、柱穴038を除く柱穴では31.22～31.35mである。柱穴038のみが30.92mとやや深い。

出土した遺物から10世紀代(京都Ⅲ期)と考えられる。

柱穴列3 [柱穴 060・086・066・045・075] (第10図、図版一・三)

A1・B1グリッド、西側溝(溝125・046・001)より東に位置する。主軸方向を南北にとり、築地推定線よりやや東に位置する4間以上の柱穴列である。柱間は、1.9～2mを測る。柱

溝001・046・125



溝001

- 1 暗褐色泥砂 炭化物含む しまり・粘性弱い
- 2 黒褐色土砂泥 灰白色粘土ブロック含む しまり弱い 粘性有り

溝046

- 1 暗灰色泥砂 炭化物含む しまり・粘性有り
- 2 灰黄色砂質土 Φ 3～5cm大の礫多く含む

溝125

- 1 灰黄色砂質土 Φ 2～3cm大の礫多く含む 砂礫層
- 2 灰黄色砂質土 黒褐色粘土混入する しまりやや有り粘性弱い



第9図 溝001・046・125 遺構図 (縮尺 1/80)

穴 086 と柱穴 060 の間隔のみが 1.5 m と狭くなる。断面形状は、方形を呈する。規模は径 45 ～ 55cm、深さは、6 ～ 40 cm で底面標高は 31 ～ 31.1 m である。柱穴 086 のみが 31.35 m とやや浅い。

出土した遺物から 10 世紀半ば～後半（京都Ⅲ期古～新）と考えられる。

柱穴列 4 [柱穴 115・102・113・119・076]（第 10 図、図版一）

A 1・B 1 グリッド、西側溝（溝 125・046・001）の東に位置する。主軸方向を南北にとり、築地推定線より約 40 cm 東に位置する 4 間以上の柱穴列である。柱間は、すべての柱穴が周囲遺構によって壊されているため正確な数値ではないが、概ね約 2 m を測る。断面形状は、残存状況から概ね方形であったと考えられる。規模は、径 30cm 以上、深さ 10 ～ 20cm、底面標高は 31.1 ～ 31.2 m を測る。

出土した遺物から 9 世紀後半～10 世紀前半（京都Ⅱ期中～新）と考えられる。

今回の調査では、築地推定線状にのる南北方向の柱穴列 1～4 とこれに直交する柱穴列 5 を検出した。柱穴列 1～4 は、西鞞負小路の東側溝と考えられる溝（001、046、125）の東側に位置し、築地芯推定線状にのり、主軸方向も一致することから、塀等の土地区画関連遺構と考えられる。柱穴列 5 は、柱穴列 1～4 に直交し、東四行北三門・四門の境界線と平行することからやはり塀などの土地区画に関連した遺構と考えられる。

柱穴列 5 [柱穴 067・010・013・135]（第 11 図、図版三）

調査区の中央 B 1・2 グリッド、東四行北三門と北四門の推定境界線より 0.6 m 南に位置し、主軸方向は東西方向である。西から柱穴 067、010、013、135 の 4 基の柱穴を確認している。

重複関係は、柱穴 067 は柱穴 066 に壊されている。これらの柱穴の平面形状は方形を呈する。柱穴 010 はやや円形に近い。規模は、径 30 ～ 40 cm、深さ 20 ～ 25cm を測る。底面標高は、概ね 31.1 m である。それぞれの柱穴において柱根が検出された。柱穴 067、010、013 は原位置を留めていると思われる状況で出土した。柱穴 135 のみが倒れたような状態で出土している。柱の形状は、柱穴 010 を除く 3 基は、一辺約 15 cm の方形の柱根であった。柱穴 010 は、長方形の板材を立てた状態で出土した。

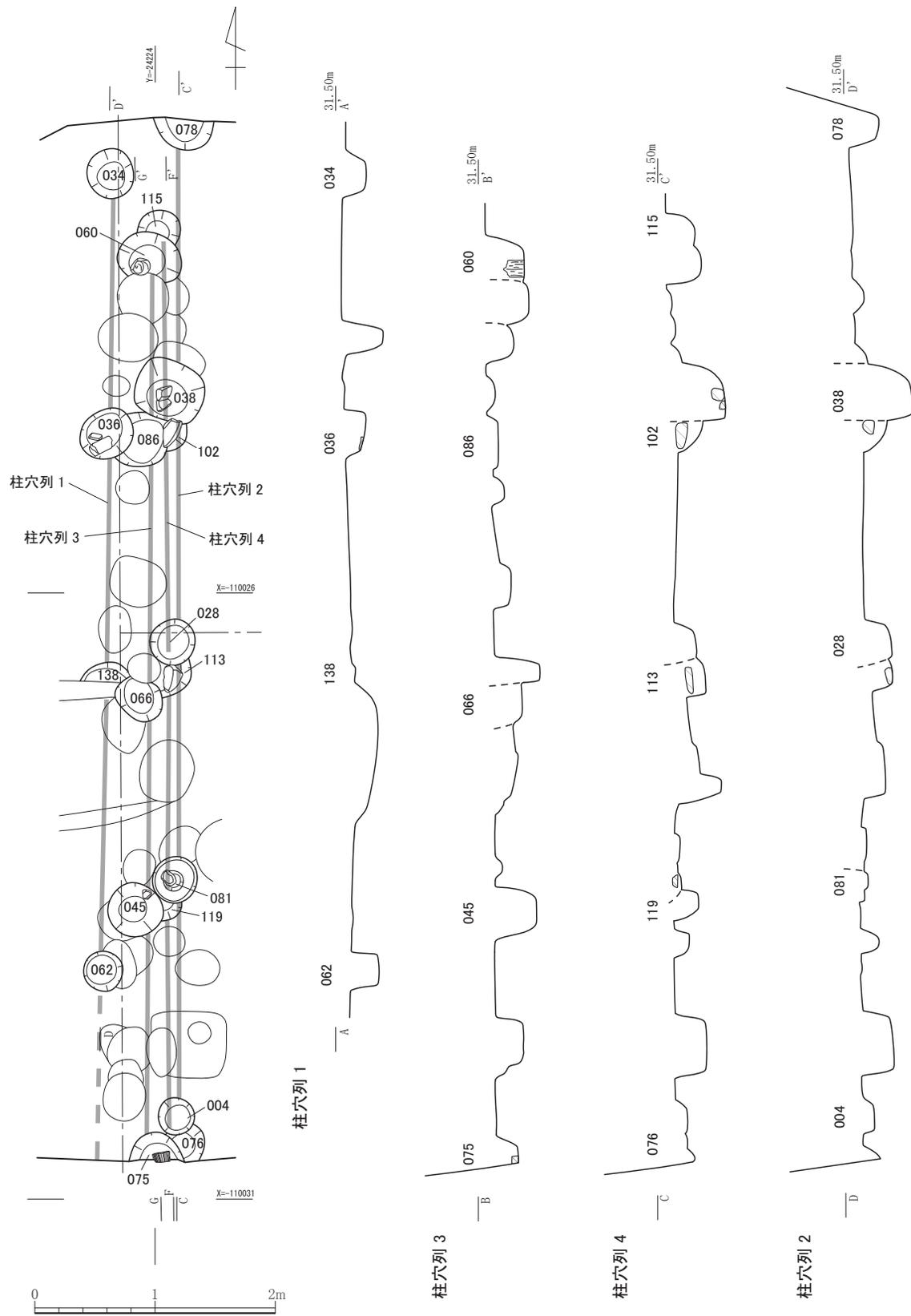
土坑 019（第 12 図、図版二）

B 2 グリッドに位置する。平面形状は長方形を呈する。規模は、長軸 90cm、短軸 61cm、深さ 40 cm を測る。断面形状は逆台形である。覆土は、褐灰色泥砂と黒色砂泥に分かれる。底部南壁際から一部欠損していると思われる一辺約 15 cm、厚さ 3 cm の板材が出土した。出土状況から礎板の可能性も考えられるが、これに対応する遺構を見つけることはできなかった。

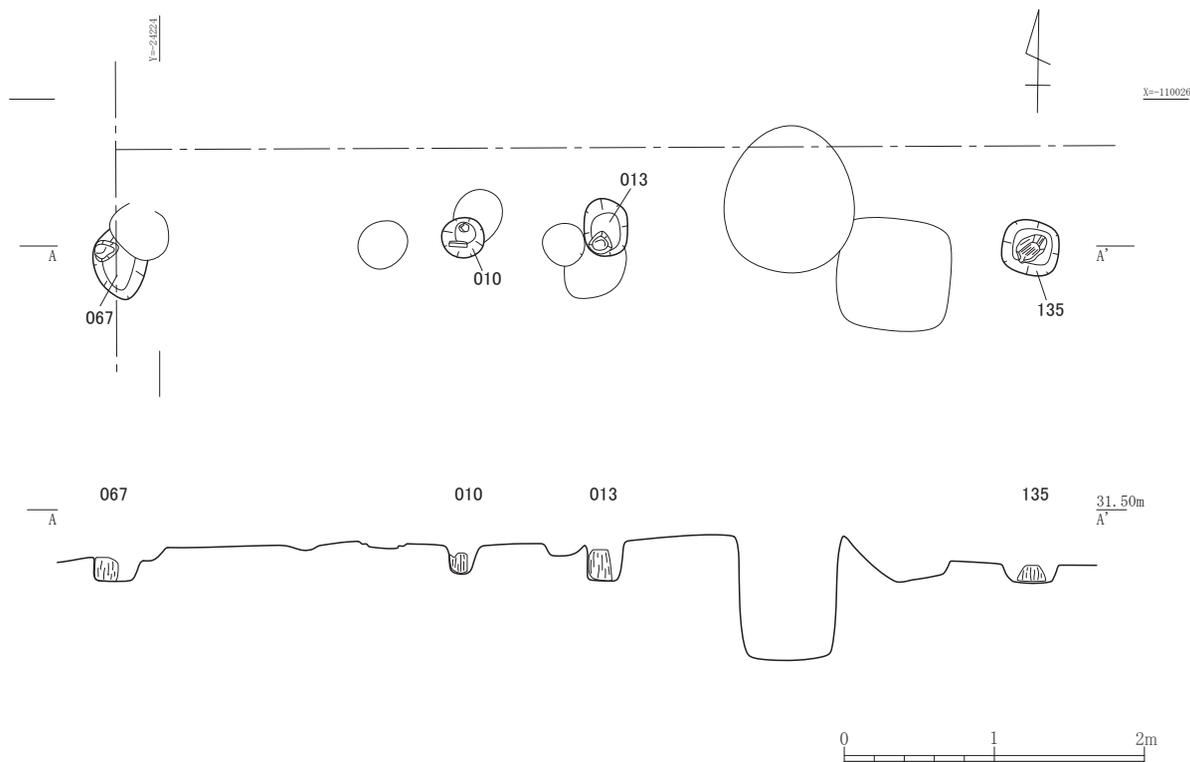
出土した遺物から 9 世紀後半（京都Ⅱ期古～中）と考えられる。

土坑 020（第 12 図、図版二）

B 2 グリッドに位置する。平面形状はやや歪んだ隅丸方形を呈する。ピット 031、ピット 061 と重複関係にあり、いずれの遺構よりも新しい。規模は、一辺 0.95 m を測る。断面形状は箱形を呈し、深さ 0.84 cm を測る。覆土は、4 層に分層しているが、1～3 層は、黒褐色砂泥層、4 層は灰白色粘土ブロックを主体に黒色粘質土が細く帯状に堆積する。検出した形状から素掘りの



第 10 图 柱穴列 1・2・3・4 遺構図 (縮尺 1/50)



第11図 柱穴列5遺構図（縮尺1/50）

井戸の可能性も考えられる。

出土した遺物から9世紀後半（京都Ⅱ期古～中）と考えられる。

土坑053（第12図、図版二）

B2・3グリッドに位置する。平面形状は、隅丸方形を呈する。規模は、一辺97cm、深さ80cmを測る。覆土は大きく2層に分かれ、上層は黒褐色粘質土、下層は径10～20cm大の灰白色粘土ブロックが堆積していた。底部には東側にテラスを持ち西側が5cm程度深くなっている状況が見られた。

出土した遺物から9世紀後半～10世紀前半（京都Ⅱ期中～Ⅲ期古）と考えられる。

土坑054（第12図、図版三）

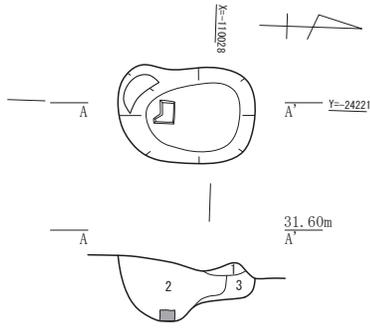
B2グリッドに位置する。土坑055と重複関係にあり、土坑055より古い。平面形状は、隅丸長方形を呈し南側は調査区外へ延びる。規模は、長軸1.82m以上、短径1.18m、深さ47cmを測る。覆土は、7層に細分されているが、大きく3つ特徴を示す。1～4層は、灰白色粘土ブロックを含む黒褐色砂泥層である。5層は、有機物を含む黒色粘質土、6～7層は、灰白色粘土ブロックを基調とする層である。東西の壁は、ほぼ垂直に立ち上がるが、北壁は、直線的に緩やかに立ち上がる。本遺構の全体像を把握できないため土坑としているが平面形状からは、溝状遺構の可能性も考えられる。柱穴列1～4の東に位置し、主軸方向が同一であることから、本遺構が内溝である可能性も考えられる。

出土した遺物から9世紀後半（京都Ⅱ期中）と考えられる。

土坑055（第12図、図版二）

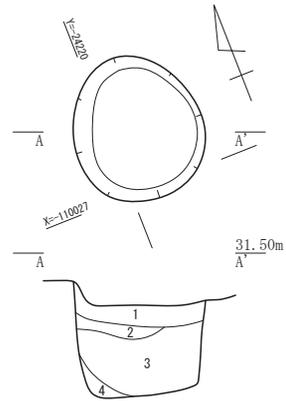
B2グリッドに位置する。土坑054、土坑047と重複関係にあり土坑054より新しく、土坑

土坑019



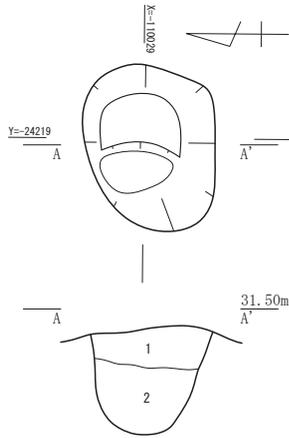
- 1 褐灰色泥砂 しまり・粘性弱い
φ1cm大の砂利多く含む
- 2 黒色砂泥 φ5cm大の白色粘土ブロック多い 炭化物含む
- 3 黒色砂泥 褐色粘土ブロック・炭化物含む

土坑020



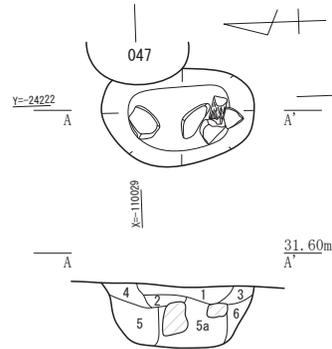
- 1 黒褐色砂泥 φ2~3cm大の礫・灰白色粘土ブロック含む
- 2 黒褐色砂泥 1層に類似するが粘性やや強い
- 3 黒褐色砂泥 φ1~5cm大の礫含む 炭化物・しまり弱い
- 4 灰白色粘質土

土坑053



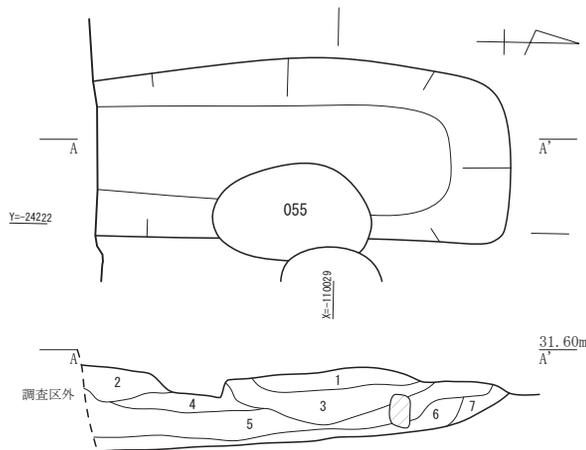
- 1 黒褐色粘質土 灰白色粘土ブロック含む 粘性強い
- 2 灰白色粘土ブロック しまり強い

土坑055



- 1 黒褐色粘質土 φ2cm大の礫含む
- 2 黒褐色粘質土 灰色粘土ブロック多く含む
- 3 黒褐色粘質土 灰色粘土ブロック多く含む 炭化物含む
- 4 灰褐色砂泥 炭化物やや多い 粘性やや弱い
- 5 灰白色粘質土
- 5a 黒褐色土 灰白色粘土ブロック多い
- 6 黒褐色土 1層に類似するがやや色調暗い

土坑054

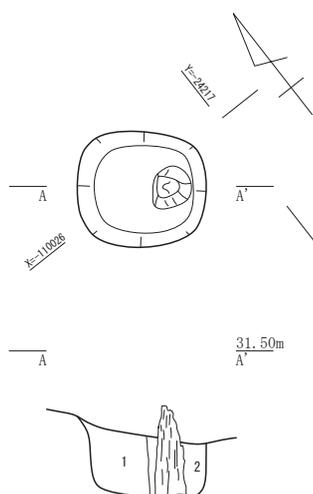


- 1 黒褐色砂泥 φ5mm大の灰白色粘土ブロック含む 炭化物少量含む
- 2 黒褐色砂泥 炭化物少量含む φ1cm大の灰白色粘土ブロック少量含む 粘性弱い
- 3 黒褐色砂泥 1層に類似するが炭化物多く含む
- 4 黒褐色粘質土 炭化物やや多く含む マンガン斑・有機物含む
- 5 黒褐色粘質土 有機物含む しまり・粘性やや強い
- 6 灰白色シルト φ10cm大の灰白色粘土ブロック多く含む
- 7 黒褐色砂泥 炭化物やや多く含む 灰白色粘土ブロック多く含む



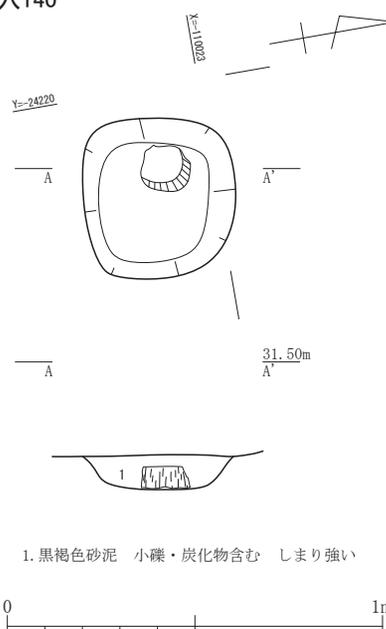
第 12 図 個別遺構図 1 (縮尺 1/50)

柱穴024



- 1 灰白色粘土ブロックを基調とし黒色粘土帯状に入る しまり強い
- 2 黒色粘質土 炭化物含む 粘性強い

柱穴140



1. 黒褐色砂泥 小礫・炭化物含む しまり強い

第 13 図 個別遺構図 2 (縮尺 1/20)

047 より古い。平面形状はやや歪んだ隅丸長方形を呈する。規模は、長軸 1.02 m、短軸 64cm、深さ 41cm を測る。遺構内からは、径 20 ~ 30cm 大の大型の礫が出土した。これらの礫には、柱等を置くために平坦面を上にしておくといた状況は見られなかった。また、大きさや配置等にも規則性が認められないことから礫を廃棄した土坑と考えられる。

出土した遺物から 9 世紀後半 ~ 10 世紀前半 (京都Ⅱ期中 ~ Ⅲ期古) と考えられる。

土坑 058 (第 8 図)

A 3 グリッドに位置する。南側上端を攪乱によって失われている。規模は、一辺 41cm 以上、深さ 12cm を測る。

出土した遺物から 9 世紀後半 ~ 10 世紀前半 (京都Ⅱ期古 ~ Ⅲ期古) と考えられる。

柱穴 024 (第 13 図)

A 3・B 3 グリッドに位置する。平面形状方形を呈する。規模は、一辺が 34cm、深さ 25cm を測る。柱穴の南東端から柱根が検出された。柱根は、一辺が約 10cm の方形である。残存高は 10cm を測る。この柱穴に対応する柱穴を検出することはできなかった。

出土した遺物から平安時代前半と考えられる。

柱穴 140 (第 13 図)

A 2 グリッドに位置する。平面形状方形の柱穴である。規模は、一辺 42 cm、深さ 10cm を測る。西壁際で柱根を検出した。柱根は、一辺 15 cm の方形である。残存高は 7 cm を測る。この柱穴に対応する柱穴を検出することはできなかった。

柱根以外に遺物が出土していないため、年代は確定し難い。

ピット 003 (第 8 図)

B 2 グリッドに位置する。平面形状は、楕円形を呈する。規模は、長軸 37cm、短軸 29cm、深さ 36cm を測る。

出土した遺物から 10 世紀半ば～ 10 世紀後半（京都Ⅲ期古～新）と考えられる。

ピット 006（第 8 図）

B 2 グリッドに位置する。平面形状は、円形を呈する。径 54cm、深さ 22 cm を測る。

出土した遺物から 9 世紀後半～ 10 世紀後半（京都Ⅱ期～Ⅲ期）と考えられる。

ピット 021（第 8 図）

B 2 グリッドに位置する。ピット 069 と重複しており、ピット 069 より古い。平面形状は、楕円形を呈する。長軸 72cm、短軸 53cm 以上、深さ 36cm を測る。

出土した遺物から 9 世紀後半～ 10 世紀前半（京都Ⅱ中～Ⅲ期古）と考えられる。

ピット 037（第 8 図）

A 1 グリッドに位置する。平面形状は、楕円形を呈する。長軸 23cm、短軸 17cm、深さ 13cm を測る。

出土した遺物から 9 世紀後半～ 10 世紀後半（京都Ⅱ期～Ⅲ期）と考えられる。

ピット 042（第 8 図）

A 3 グリッドに位置する。平面形状は、楕円形を呈する。規模は、長軸 49 cm、短軸 42cm、深さ 15cm を測る。

出土した遺物から 9 世紀後半～ 10 世紀後半（京都Ⅱ期～Ⅲ期）と考えられる。

ピット 059（第 8 図）

A 1 グリッドに位置する。平面形状は、円形を呈する。規模は、径 43cm、深さ 37cm を測る。出土した遺物から 9 世紀後半～ 10 世紀前半と考えられる。

ピット 120（第 8 図）

B 2 グリッドに位置する。土坑 073 と重複関係にあり、土坑 073 より古い。平面形状は、隅丸方形を呈する。一辺が 55cm、深さ 25cm を測る。

出土した遺物から 9 世紀前半～半ば（京都Ⅰ期中～Ⅱ期古）と考えられる。

第4章 遺物

第1節 遺物の概要

今回の調査で出土した遺物はコンテナ数で10箱である。整理段階でランク分けを行った結果、17箱となった。遺物の種類は土師器、須恵器、陶磁器、焼締陶器、瓦質土器、弥生土器、瓦、石製品など弥生時代から江戸時代までの遺物が出土した。以下、遺構別に概要を述べる。掲載遺物の詳細については、第7表の出土遺物観察表に記載した。

第4表 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク点数	Cランク点数
平安時代中期以降	瓦質土器、瓦器、焼締陶器		瓦質土器1点		
平安時代前期	土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、黒色土器、瓦、石製品、木製品		土師器14点、須恵器21点、緑釉陶器40点、灰釉陶器8点、白色土器1点、黒色土器5点、瓦5点、石製品1点、木製品7点		
弥生時代～古墳時代	弥生土器、須恵器、石製品		弥生土器1点、石製品1点		
合計		17箱	105点(8箱)	1箱	8箱

第2節 土器類

溝046 (第14図、図版五・七)

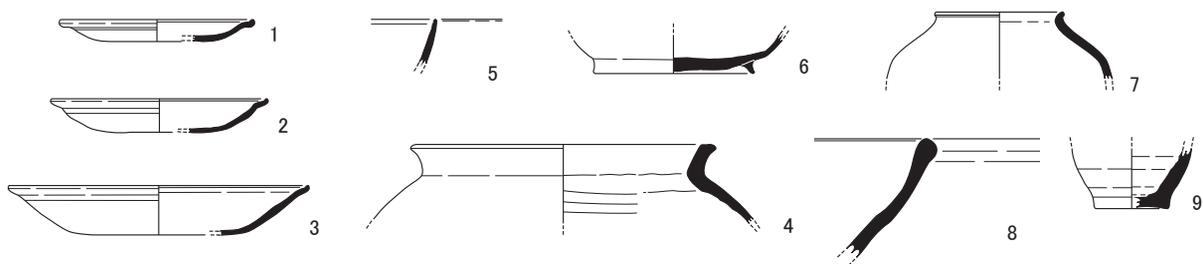
1～3は土師器の皿である。薄手の「て」の字状口縁で、1・2は口径10.4～11.6cmの小型、3は口径16.0cmの大型である。4は土師器の甕である。口縁の開きは小さく、口縁端部は水平な面をなす。外面に煤が付着する。5・6は黒色土器の椀である。5はB類で、口縁部内面に一条の沈線が巡る。6はA類で、高台は断面逆三角形で外傾する。7は灰釉陶器の短頸壺である。8は須恵器の鉢である。口縁部は玉縁状で、黒味がかかる。9は須恵器の小瓶である。底部外面に回転糸切り痕が残る。68は須恵器の甕の体部で、外面に格子タタキ目、内面に同心円状の当て具痕がみられる。内外面及び破断面の2面に漆が付着する(図版七)。

溝046から出土した遺物は、10世紀半ば～後半(京都Ⅲ期古～新)のものと考えられる。

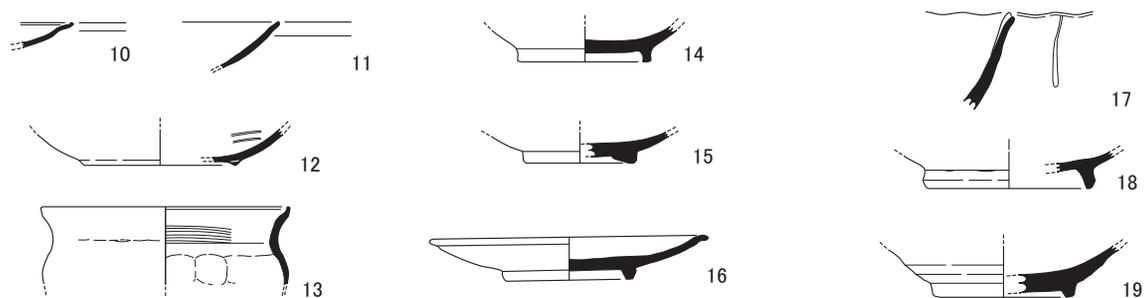
溝001 (第14図・図版五・七)

10・11は土師器の皿である。薄手で口縁部は外反し、端部の内側は小突起状に収める。12は黒色土器の椀である。A類で、断面逆三角形の高台がつく。13は黒色土器の甕である。口縁部の開きは小さい。14・15は緑釉陶器の椀である。14は貼付け輪高台、15は削り出しの蛇の目高台である。16は白色土器あるいは緑釉陶器の素地の皿である。輪高台で、口縁部は外反する。17は灰釉陶器の輪花椀である。口縁端部を外側から押し込み、その位置から縦に沈線を施し花弁を表現する。18は灰釉陶器の椀である。貼付け高台で、見込に重ね焼き痕がみられる。19は須恵器の椀である。削り出し高台で、見込に重ね焼き痕がみられる。重ね焼き痕の内側と断面は赤色化する。69は須恵器の甕の体部である。外面に平行タタキ目、内面に同心円状の当て具痕

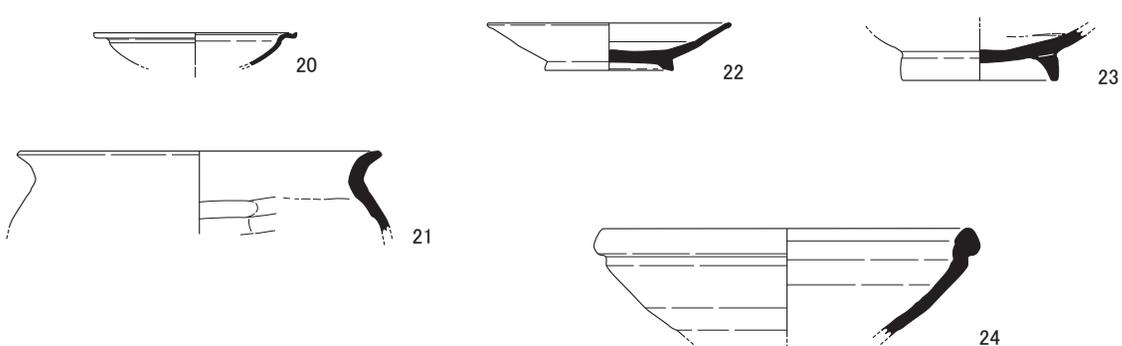
溝 046



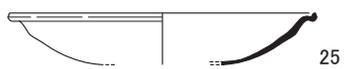
溝 001



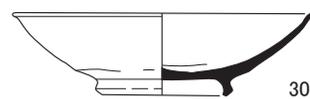
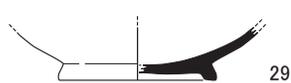
溝 125



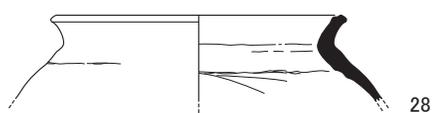
柱穴列1
柱穴 034



土坑 019



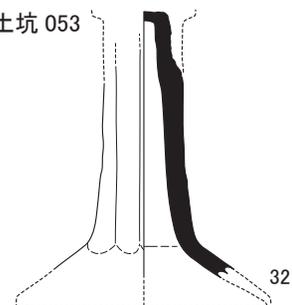
柱穴列3
柱穴 045



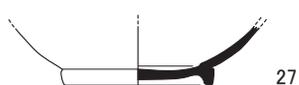
土坑 020



土坑 053



柱穴 060



柱穴 075



第 14 図 出土遺物実測図 1 (縮尺 1/4)

がみられる。内面に煤がわずかに付着する。70・71は須恵器の坏蓋である。71は縁部外面に波状文がみられる。70・71は古墳時代の混入品である。(図版七)

溝 001 から出土した遺物は、9世紀後半～10世紀前半(京都Ⅱ期中～新)のものと考えられる。
溝 125 (第 14 図、図版五)

20は土師器の皿である。薄手の「て」の字状口縁で、口径 10.8cm の小型である。21は土師器の甕である。口縁部は「く」の字に折れる。外面に煤が付着する。22は緑釉陶器の皿である。高台は有段輪高台で、体部内面に一条の沈線が巡る。高台内に回転糸切り痕が残る。見込にはトチン跡、また素地の乾燥・焼成時に生じたヒビを施釉前に埋めたとみられる補修跡が残る。近江産である。23は灰釉陶器の椀である。高台内は回転糸切り痕がナデ消される。見込みと高台端部に重ね焼き痕が残る。内面の重ね焼き痕の外側に施釉がみられる。24は須恵器の鉢である。口縁部は玉縁状である。胎土に黒色粒が多く含まれる。

溝 125 から出土した遺物は、10世紀半ば～後半(京都Ⅲ期古～新)のものと考えられる。

柱穴列 1 柱穴 034 (第 14 図、図版五)

25は土師器の皿である。薄手の「て」の字状口縁で、口径 16.4cm の大型である。

柱穴 034 から出土した遺物は、10世紀半ば～後半(京都Ⅲ期古～新)のものと考えられる。

柱穴列 3 柱穴 075 (第 14 図、図版五)

26は須恵器の小瓶であろうか。高台は断面逆台形で、体部下方に一条の沈線が巡る。

柱穴 075 から出土した遺物は、9世紀後半～10世紀前半(京都Ⅱ期古～新)のものと考えられる。

柱穴列 3 柱穴 060 (第 14 図、図版五)

27は須恵器の椀である。内面は摩滅のため平滑になっている。

柱穴 060 から出土した遺物は、9世紀後半～10世紀後半(京都Ⅱ期～Ⅲ期)のものと考えられる。

柱穴列 3 柱穴 045 (第 14 図、図版六)

28は土師器の甕である。外面に煤が付着する。

柱穴 045 から出土した遺物は、10世紀半ば～後半(京都Ⅲ期古～新)のものと考えられる。

土坑 019 (第 14 図、図版六)

29は緑釉陶器の椀である。高台は削り出しで、焼成はやや硬質である。30は灰釉陶器の椀である。見込に重ね焼き痕が残る。内面の見込以外と外面の口縁部から体部下方まで施釉する。高台は外傾し、外側に面をもつ。

土坑 019 から出土した遺物は、9世紀後半(京都Ⅱ期古～中)のものと考えられる。

土坑 020 (第 14 図、図版六)

31は須恵器の瓶である。高台は断面台形で、高台内に回転糸切り痕が残る、一文字のヘラ記号がみられる。

土坑 020 から出土した遺物は、9世紀後半(京都Ⅱ期古～中)のものと考えられる。

土坑 053 (第 14 図、図版六)

32 は白色土器の高坏の脚部である。縦方向のケズリを施し、断面 8 角形を呈す。

土坑 053 から出土した遺物は、9 世紀後半～10 世紀前半（京都Ⅱ期中～Ⅲ期古）のものと考えられる。

土坑 054 (第 15 図、図版六)

33 は土師器の皿である。薄手で口縁部は外反し、端部の内側は小突起状に収める。34 は緑釉陶器の椀である。円盤状高台である。畿内産と考えられる。35 は緑釉陶器の椀の素地である。口縁部は外反し、内外面にヘラミガキがみられる。口縁端部はやや黒色化する。36 は須恵器の蓋である。37・38 は須恵器の坏身である。37・38 とも、高台は底部から体部が立ち上がる屈曲部よりもやや内側につき、断面方形である。39 は須恵器の鉢である。底部外面に回転糸切り痕が残り、一文字のヘラ記号がみられる。40 は須恵器の小瓶である。高台内に一文字のヘラ記号がみられる。底部内面と体部外面に自然釉がかかる。41 は須恵器の甕の体部片である。外面に樹枝状のタタキを施し、内面に青海波状の当て具痕が残る。

土坑 054 から出土した遺物は、9 世紀後半（京都Ⅱ期中）のものと考えられる。

土坑 058 (第 15 図、図版六)

42 は緑釉陶器の椀である。蛇の目高台で、畳付には回転糸切り痕がわずかに残る。見込みには一条の沈線が巡るがロクロ目とずれた位置にみられる。焼成は硬質である。43 は緑釉陶器の椀の素地である。44 は緑釉陶器の皿である。輪高台で、口縁部は強く外反する。焼成は軟質である。

土坑 058 から出土した遺物は、9 世紀後半～10 世紀前半（京都Ⅱ期古～Ⅲ期古）のものと考えられる。

ピット 003 (第 15 図、図版六)

45 は土師器の皿である。薄手の「て」の字状口縁で、口径は復元できないが大型のものである。46 は緑釉陶器の椀である。高台は有段輪高台に近い。焼成は軟質である。

ピット 003 から出土した遺物は、10 世紀半ば～後半（京都Ⅲ期古～新）のものと考えられる。

ピット 006 (第 15 図、図版六)

47 は緑釉陶器の椀である。口縁部は外反する。焼成は硬質である。48 は須恵器の鉢である。口縁部は外側に肥厚し、上方につまみ上げる。口縁部が黒色化する。

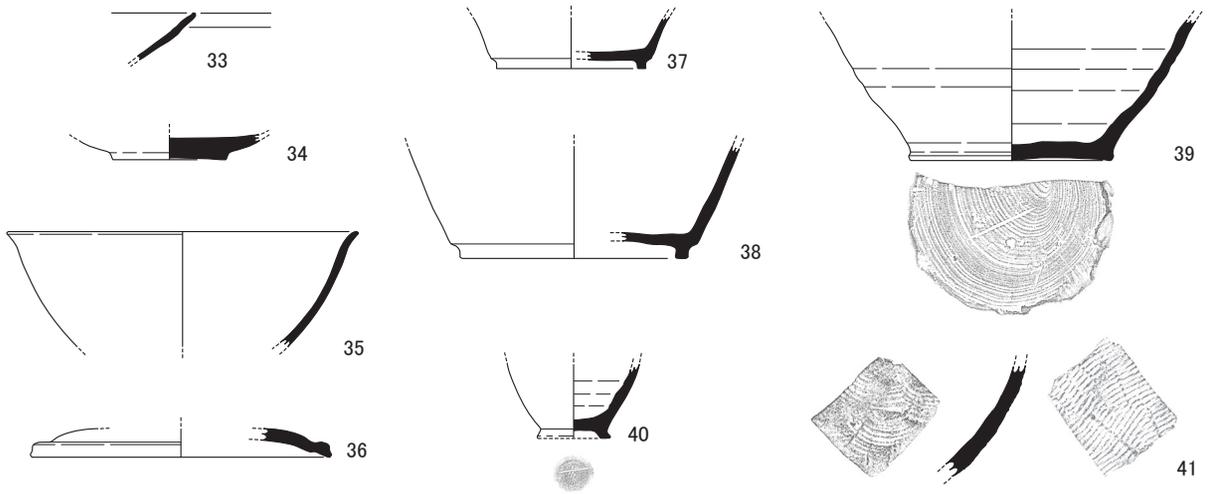
ピット 006 から出土した遺物は、9 世紀後半～10 世紀後半（京都Ⅱ期～Ⅲ期）のものと考えられる。

ピット 021 (第 15 図、図版六・七)

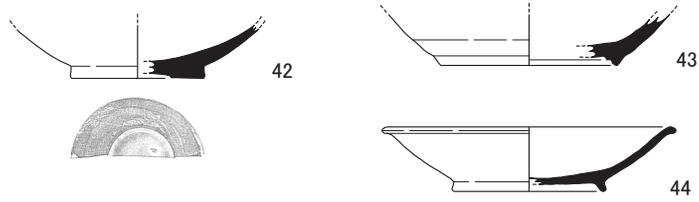
49 は須恵器の坏身である。古墳時代の混入品か。72 は灰釉陶器の椀である。体部内外面に施釉する（図版七）。

ピット 021 から出土した遺物は、9 世紀後半～10 世紀前半（京都Ⅱ期中～Ⅲ期古）のものと考えられる。

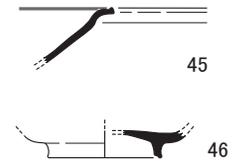
土坑 054



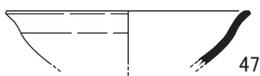
土坑 058



ピット 003



ピット 006



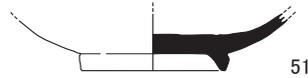
ピット 021



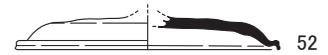
ピット 037



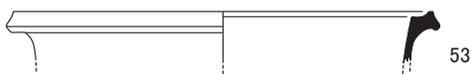
ピット 042



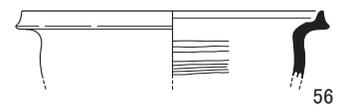
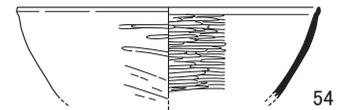
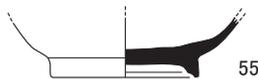
ピット 120



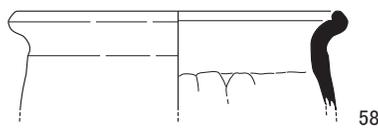
南壁2層



南壁5層



包含層



第15図 出土遺物実測図2 (縮尺 1/4)

ピット 037 (第 15 図、図版六)

50 は緑釉陶器の皿である。中央の割りこみが浅い蛇の目高台である。畳付には多数の圧痕が残る。焼成は硬質である。

ピット 037 から出土した遺物は、9 世紀後半～10 世紀後半(京都Ⅱ期～Ⅲ期)のものと考えられる。

ピット 042 (第 15 図、図版六)

51 は灰釉陶器の椀である。高台は断面逆三角形である。見込に重ね焼き痕が残る。見込は摩滅のため平滑になっている。

ピット 042 から出土した遺物は、10 世紀半ば～後半(京都Ⅲ期古～新)のものと考えられる。

ピット 120 (第 15 図、図版七)

52 は須恵器の坏蓋である。天井部は平坦でつまみがついていた形跡がある。

ピット 120 から出土した遺物は、9 世紀前半～半ば(京都Ⅰ期中～Ⅱ期古)のものと考えられる。

南壁 2 層 (第 15 図)

53 は瓦質土器の鍋である。受け口状の口縁部は端部が尖って仕上げられる。14 世紀のものと考えられる。

南壁 5 層 (第 15 図、図版七)

54 は黒色土器 A 類の椀である。口縁部内面に一条の沈線が巡る。55 は緑釉陶器の椀である。高台は有段輪高台で、高台内に回転糸切り痕が残る。見込にトチン跡が残る。焼成は軟質である。56 は弥生土器の鉢または台付き鉢である。口縁部に最大径があり、肩はわずかに張るが、体部は下方にすぼみ、文様は施していない。口縁部外面は、側面を強くなでて上下に拡張し、内面は上部に湾曲する。形態よりみて、弥生時代中期のものであろう。明確に弥生土器と認定できる破片はこの 1 点だけである。

包含層 (第 15 図、図版七)

57 は土師器の皿である。薄手の「て」の字状口縁である。58 は土師器の甕である。口縁部は内側に折れるように肥厚する。外面に煤が付着する。59 は灰釉陶器の椀である。高台はやや外傾し、外側に面をもつ。見込と高台端部に重ね焼き痕が残る。60 は須恵器の鉢である。口縁部は玉縁状である。胎土に黒色粒が多く含まれる。内外面に少量の煤が付着する。

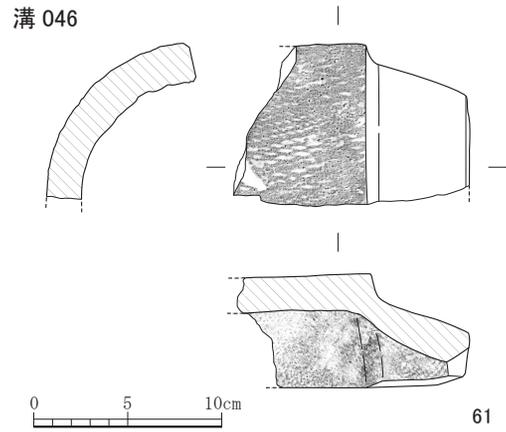
包含層から出土した遺物は、9 世紀後半～10 世紀半ば(京都Ⅱ期古～Ⅲ期古)のものと考えられる。

第3節 瓦 (第16・17図、図版八)

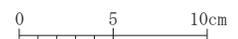
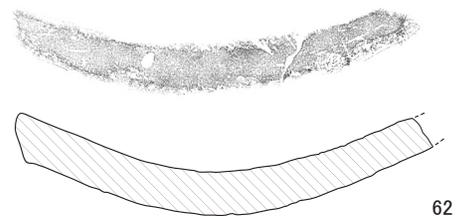
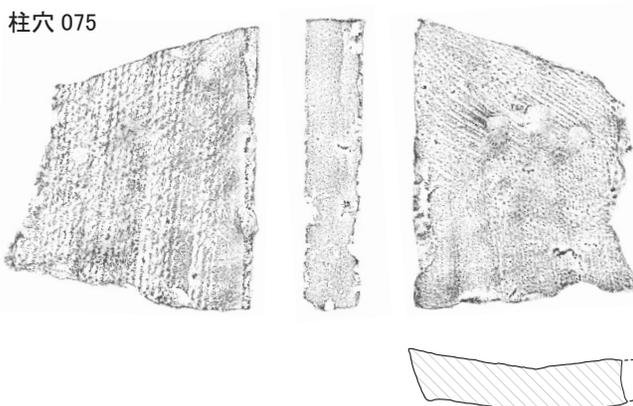
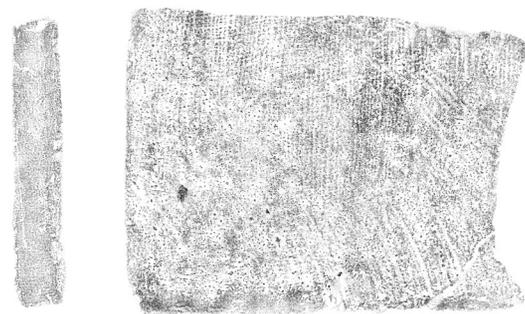
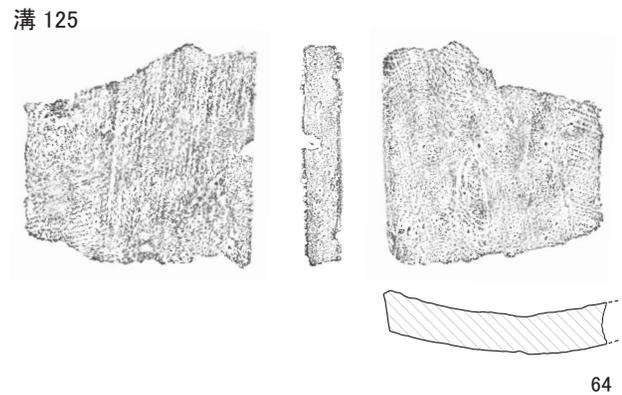
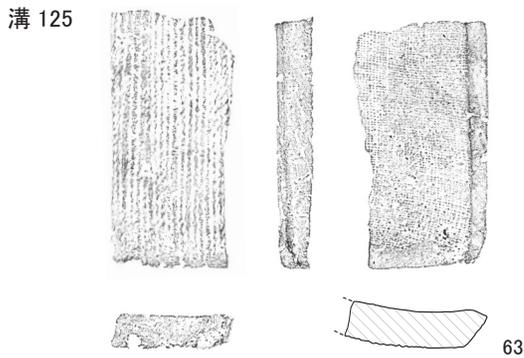
61は丸瓦である。凸面には縄目痕、凹面には布目痕が残る。溝046から出土した。

62は平瓦である。凹面には布目痕、凸面には縄目痕が残る。溝046から出土した。

63・64は平瓦である。63の凹面には布目痕、凸面には縄目痕が残る。胎土に砂粒・石粒が多く含まれる。64の凹面の布目痕は乱れが目立ち、木挽き痕が残る。凸面は布目痕が残る。胎土に砂粒・石粒が多く含まれる。溝125から出土した。



第16図 出土丸瓦実測図 (縮尺1/4)



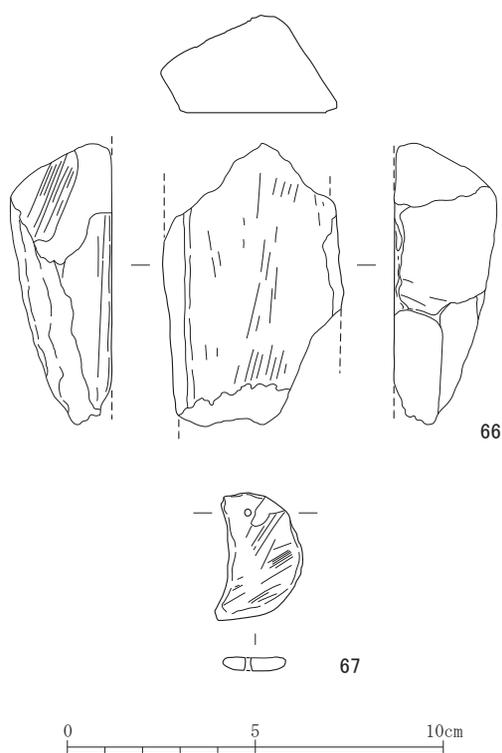
第17図 出土平瓦実測図 (縮尺1/4)

65は平瓦である。凹面には布目痕、凸面には縄目痕が残る。胎土に砂粒・石粒が多く含まれる。柱穴075から出土した。

第4節 石製品 (第18図)

66は石製品の砥石である。使用痕は4面みられるが、うち2面は破損した面を再び砥石として使用したものと思われる。溝001から出土した。

67は石製模造品の勾玉である。長さ3.4cm、幅2.0cm、厚さ3.5mmで、上部に径1.5mmの穿孔がみられる。滑石製である。ピット059から出土した。ピット059の年代は他の遺物から、9世紀後半～10世紀前半とみられ、67は古墳時代の混入品と考えられる。



第18図 出土石製品実測図 (縮尺 1/2)

第5章 自然科学分析

平安京右京四条二坊一町跡のプラント・オパール分析

森 将志 (パレオ・ラボ)

1. はじめに

平安京右京四条二坊一町跡において、遺跡周辺の古植生に関する手掛かりを得るためにプラント・オパール分析用の試料が採取された。以下では、試料について行ったプラント・オパール分析の結果を示し、遺跡周辺のイネ科植物相について検討した。

2. 分析試料および方法

分析試料は、B 2 グリッド 第5表 分析資料一覧

の土坑 054 から採取された 1
点と、B 1 グリッドから採取
された 3 点 (1 ~ 3 層) の、
計 4 試料である (第 5 表)。

試料 No.	地区	遺構	層位	時期	土相
No. 1	B2	土坑 054		9 世紀後半	黒色 (10YR2/1) 粘土
No. 2	B1		1 層	中世初期	にぶい黄褐色 (10YR4/3) シルト
No. 3			2 層		黒褐色 (10YR3/2) シルト
No. 4			3 層		暗褐色 (10YR3/3) シルト

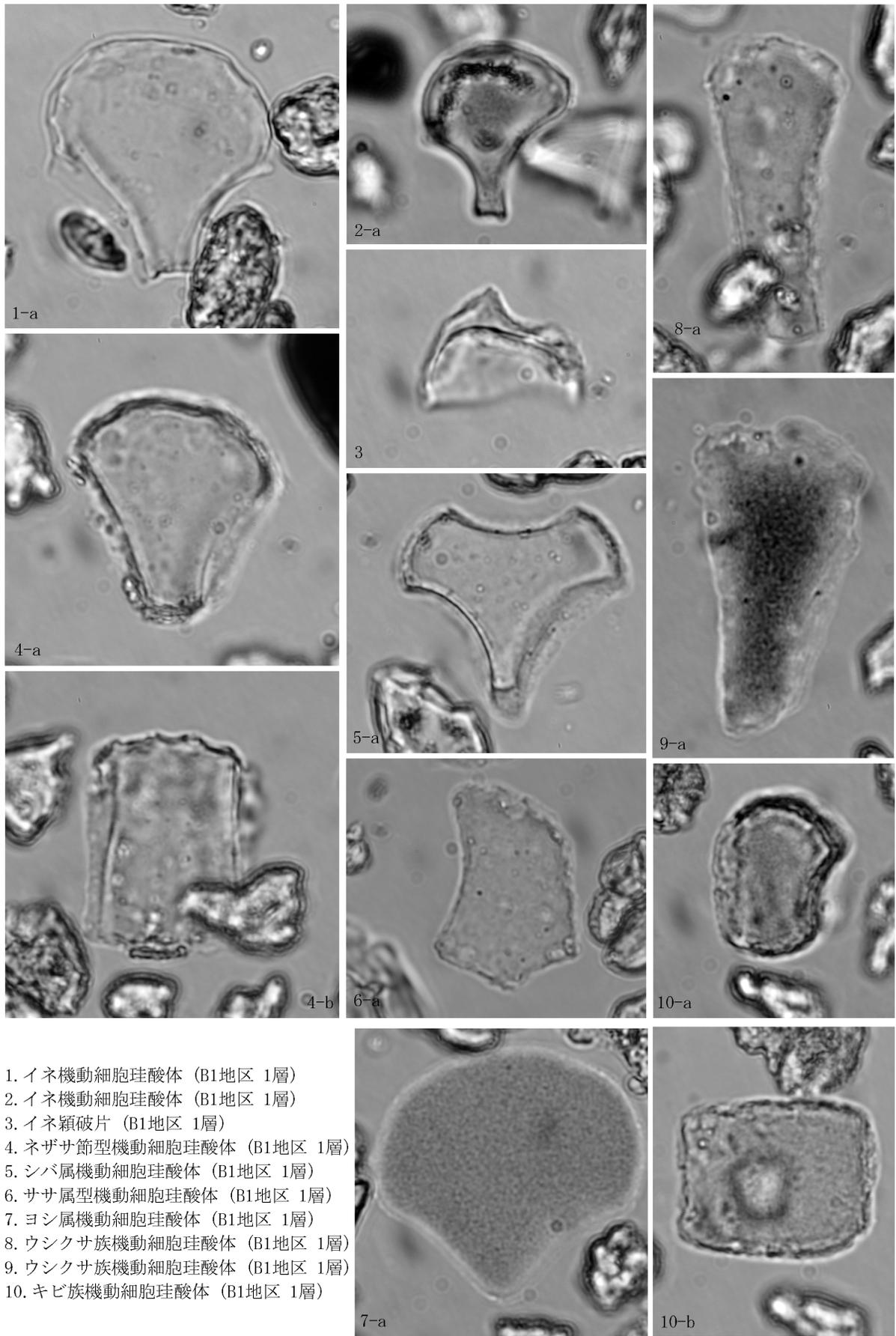
B 2 グリッドの土坑 054 の堆積時期は 9 世紀後半、B 1 グリッドの 1 ~ 3 層の堆積時期は中世初期と考えられている。これらの試料について、以下の手順で分析を行った。

秤量した試料を乾燥後、再び秤量する (絶対乾燥重量測定)。別に試料約 1 g (秤量) をトールビーカーにとり、約 0.02g のガラスビーズ (直径約 0.04mm) を加える。これに 30% の過酸化水素水を約 20 ~ 30cc 加え、脱有機物処理を行う。処理後、水を加え、超音波洗浄機による試料の分散後、沈降法により 0.01mm 以下の粒子を除去する。この残渣よりグリセリンを用いて適宜プレパラートを作製し、検鏡した。同定および計数は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパールについて、ガラスビーズが 300 個に達するまで行った。また、植物珪酸体の写真を撮り、第 19 図に載せた。

3. 結果

同定・計数された各植物のプラント・オパール個数とガラスビーズ個数の比率から試料 1 g 当りの各プラント・オパール個数を求め (第 6 表)、分布図に示した (第 20 図)。以下に示す各分類群のプラント・オパール個数は、試料 1 g 当りの検出個数である。

4 試料の検鏡の結果、イネ機動細胞珪酸体とネザサ節型機動細胞珪酸体、ササ属型機動細胞珪酸体、他のタケ亜科機動細胞珪酸体、ヨシ属機動細胞珪酸体、シバ属機動細胞珪酸体、キビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の 8 種類の機動細胞珪酸体の産出が確認できた。また、イネの籾殻に形成されるイネ穎破片やポイント型珪酸体の産出も確認できる。このうち、いずれの試料においてもネザサ節型機動細胞珪酸体やキビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の産出量が比較的多く、特に B 2 グリッドの土坑 054 では、これらの分類群の産出が B 1 グリ



1. イネ機動細胞珪酸体 (B1地区 1層)
2. イネ機動細胞珪酸体 (B1地区 1層)
3. イネ穎破片 (B1地区 1層)
4. ネザサ節型機動細胞珪酸体 (B1地区 1層)
5. シバ属機動細胞珪酸体 (B1地区 1層)
6. ササ属型機動細胞珪酸体 (B1地区 1層)
7. ヨシ属機動細胞珪酸体 (B1地区 1層)
8. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (B1地区 1層)
9. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (B1地区 1層)
10. キビ族機動細胞珪酸体 (B1地区 1層)

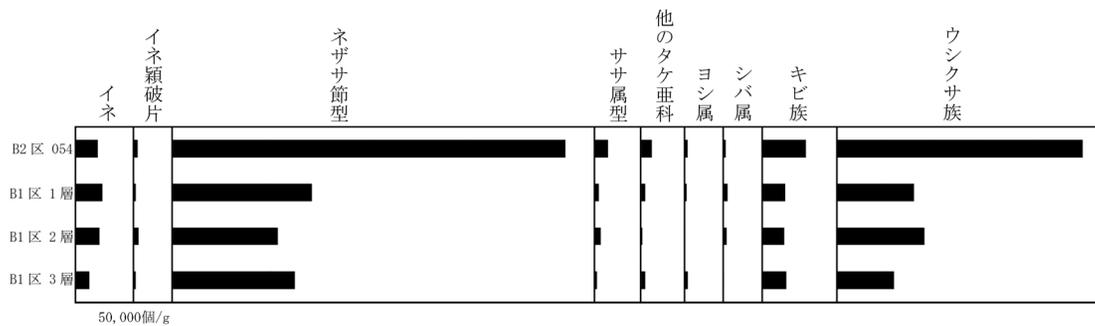
0.02mm

第19図 植物珪酸体

ツドの試料と比べると多い。

第6表 資料1 g 当りのプラント・オパール個数

	イネ (個 / g)	イネ穎破片 (個 / g)	ネザサ節型 (個 / g)	ササ属型 (個 / g)	他のタケ亜科 (個 / g)	ヨシ属 (個 / g)	シバ属 (個 / g)	キビ族 (個 / g)	ウシクサ族 (個 / g)	ポイント型珪 酸体 (個 / g)
B2 054	22,000	3,900	401,300	12,900	10,400	2,600	1,300	44,000	249,800	9,100
B1 1層	26,500	1,200	141,800	3,500	3,500	1,200	3,500	23,100	78,400	2,300
B1 2層	23,900	4,600	107,100	5,700	1,100	0	2,300	21,600	88,800	4,600
B1 3層	13,000	1,200	124,200	1,200	3,500	2,400	0	23,700	58,000	3,500



第20図 植物珪酸体分布図

4. 考察

中世初期とされるB1グリッドの1～3層では、ネザサ節型機動細胞珪酸体やキビ族機動細胞珪酸体、ウシクサ族機動細胞珪酸体の産出が目立つ。試料採取地点周辺の開けた場所にはネザサ節型のササ類やキビ族、ウシクサ族が生育していたと思われる。また、1層や3層では抽水植物のヨシ属の産出も見られ、試料採取地点周辺における湿地的環境の存在を示唆する。さらに、イネ機動細胞珪酸体やイネの穎破片の産出も見られ、B1グリッド周辺にはイネの葉身や籾殻が存在していたと思われる。こうした珪酸体は、B1グリッドの1～3層を通じてほぼ同様な組成を示しているため、1層から3層の堆積期間を通じて、B1グリッド周辺には同様のイネ科植物相が分布を広げていたと思われる。ただし、イネ機動細胞珪酸体については上位層に向かってやや増加傾向が見られるため、B1グリッドの上位層の堆積時期の方が、周辺にイネの葉身が多く存在していた可能性がある。

B2グリッドの土坑054では、B1グリッドに比べると珪酸体の産出量が全体的に多い。こうした産出量の相違が生じる理由としては、B1グリッドに比べてB2グリッド周辺に多くのイネ科植物が繁茂していた可能性や、遺構や堆積環境の違いによってイネ科植物の葉身の集積に違いが生じた可能性、イネ科植生の時期差を反映している可能性などが考えられる。ただし、イネ機動細胞珪酸体についてはB2グリッドの土坑054の方が多いう傾向は見られず、イネの葉身についてはB1グリッドと同様の堆積をしていたと考えられる。

第6章 まとめ

今回の調査では、調査区全面にわたり削平の影響を受けており、地山面での1面調査となった。検出した遺構、遺物は、平安時代前期9世紀中葉から10世紀が中心であった。地山面より上層の面については部分的ではあるが、調査区壁面で整地層と考えられる堆積状況が確認できた。調査面より上層では、3層の整地層と考えられる層を確認した。

遺構は全て平安京に係わるものであった。調査地は、平安京以前の遺跡範囲ではないが包含層や遺構の覆土からわずかではあるが弥生土器片、古墳時代の須恵器片、石製模造品等が出土している。

第1節 土地区画関連遺構

今回の調査では、西鞞負小路路面遺構、東側遺構、築地等の土地区画関連遺構の検出が想定された。路面遺構は検出できなかったが、2時期3条の溝(001、046、125)、築地芯推定線上にのる柱穴列1～4を検出した。また、この柱穴列に直交し、東四行北三門・四門の境界推定線と平行し、東西に延びる柱穴列5を検出した。

築地芯推定線上を中心として東西に約1.2mの幅で44基のピット群を検出した。これらの内、柱穴列として確認できたのは19基4列であった。築地芯推定線上にのるが柱穴列である状況からは築地塀ではなくそれ以外の塀であった可能性が考えられる。また、柱穴列が4列検出されている状況から少なくとも4回の造り替え等が行われた状況が見て取れる。ただし、柱穴列として並びを確認できた柱穴以外にも25基のピットを柱穴列と重複した状態で検出している。これらの状況から、複数回にわたり、補修等が行われたと考えられる。

この柱穴列1～4に直交し、東四行北三門・四門の境界推定線よりやや南にずれるが、それに並行して東西に延びる柱穴列5を検出している。この状況から柱穴列5は土地の境界を示す遺構と考えられる。柱穴列1～4からは、9世紀後半～10世紀後半の遺物が出土している。また、柱穴列5からは、小片のため図示していないが、9世紀後半～10世紀中ごろの遺物が出土している。柱穴列1～4と柱穴列5は、ほぼ同時期の土地区画関連遺構と考えられる。

柱穴列1～4の西側では、2時期3条の溝(001、046、125)を検出した。築地芯推定線上に位置する柱穴列より西に位置することから、これら3条の溝は西鞞負小路の東側溝の可能性が考えられる。溝001が9世紀後半～10世紀前半で溝046、125は、出土遺物で見ると時期差はなく、10世紀半ば～10世紀後半で最も東に位置する溝001よりやや新しい。溝001の幅は80cm以下で、これに対し溝046は1.2m、溝125は西壁が調査区外であるが検出幅は90cm以上を測る。また、溝001の深さが最も浅く、溝046は約6cm程度と大きな差はないがやや深くなる。溝125については約50cmで最も深い。雨水や生活排水あるいは北からの自然水流に対して適切な規模に造り替えが行われたと思われる。

溝の埋没状況は、溝 001、046 が砂泥層で埋没しているのに対して、溝 125 は砂礫によって埋没している。これについては、西鞆負小路より東の西大宮大路が 10 世紀の洪水で埋没したことや、西堀川小路やその西側溝上に大規模な洪水層が確認されていることから、溝 125 の砂礫層についても洪水による埋没の可能性が考えられる。

第 2 節 柱根

今回の調査は、調査区内の殆どの地点で大きく削平を受けていたために失われた遺構等も多くあったように思われる。柱穴 024、柱穴 140 等、柱根を伴っていないながらこれらに対応する遺構を見出すことはできなかった。調査区外へ広がる可能性も考えられるが、調査区内は削平によって数 cm しか残らないピット・土坑等も多く見られることから、失われた可能性も高いと思われる。

柱穴 024・柱穴 140 以外にも柱根の残る柱穴を検出している。柱穴列 2 の柱穴 060、柱穴列 5 の柱穴 067、柱穴 010、柱穴 013、柱穴 135 また、土坑からの出土であり、対応する遺構が見られない事から礎板としては疑問がのこるが、板状の木材が土坑 019、055 から出土した。これらの木材は、樹種同定の結果、全てヒノキであった。

第 3 節 結び

今回の調査で検出された遺構からは、9 世紀中葉～10 世紀中ごろまでの遺物が出土している。出土遺物は、緑釉陶器、灰釉陶器、須恵器、瓦、土師器皿等であった。このうち、灰釉陶器、須恵器では、見込みに重ね焼き痕の残るものにはその部分をすり消したものが多く認められた。

北壁東側、東壁南側、南壁西側において部分的ではあるが 3 層からなる整地層と思われる堆積状況を確認した（第 7 図参照）。特に南壁では、これらの層が溝 001、046、125 を覆っている状況が確認できた。これらの層から出土した遺物は、南壁 2 層から 14 世紀のものと考えられる瓦質土器の破片が 1 点出土したのみであり、溝の直上に堆積する層の年代を知ることはできなかった。ただし、今回の調査における出土遺物は 10 世紀後半を下ることはない。この結果から 10 世紀後半から 11 世紀前半には、3 層は堆積していたと考えられる。これらの 3 層の堆積物にプラントオパール分析を行った。ネザサやウシクサなどの湿地性の植物が生育していたとの結果を得られた。（第 5 章参照）。

各遺構から出土した遺物の年代観等から 10 世紀中ごろ～10 世紀後半には、宅地としての土地利用は終わり、その後、湿地化していったものと考えられる。

参考・引用文献

- 長谷川行孝 1986『平安京跡発掘調査報告書』学校法人両洋学園内平安京跡発掘調査会
- 網伸哉 1988「平安京右京六条二坊1」『京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 辻祐司・本弥八郎・加納敬二 1988「平安京右京八条二坊」『京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 辻祐司・近藤知子 1996「平安京右京八条二坊」『平成5年 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 山本雅和 1997「平安京の路について」『立命館大学考古学論集 I』
- 百瀬正恒 2004『平安京右京六条三坊二町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 山田邦和 2007『平安京の条坊制』シンボジュウム『古代都市と条坊制』（2005）
- 小檜山一良・能芝勉・近藤奈央 2008『平安京右京六条二坊六町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 江谷寛 2009「平安京右京内5遺跡」平安京右京四条二坊八町跡（財）考古学協会
- 布川豊治 2015『平安京右京四条二坊十一町・西堀川小路跡、御土居跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所
- 百瀬正恒 2015『平安京右京三条二坊七町跡・西ノ京発掘調査報告書』国際文化財株式会社
- 小檜山一良『平安京右京六条二坊三・六・十一町の調査』（財）京都市埋蔵文化財研究所

第7表 出土遺物観察表

遺物 番号	遺構	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
1	溝 046	土師器	皿	(10.4)	1.2	-	ヨコナデ、 オサエ	ヨコナデ、 ナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
2	溝 046	土師器	皿	(11.6)	0.8	-	ヨコナデ、 オサエ	ヨコナデ、 ナデ	10YR8/2 灰白色	
3	溝 046	土師器	皿	(16.0)	2.6	-	ヨコナデ、 オサエ	ヨコナデ、 ナデ	2.5Y7/2 灰黄色	
4	溝 046	土師器	甕	16.2	[4.2]	-	ヨコナデ、 オサエ後ナ デ	ヨコナデ、 オサエ後ナ デ	7.5YR4/3 褐色	
5	溝 046	黒色土器	椀	-	[2.4]	-	ヨコナデ、 ミガキ	ヨコナデ、 ミガキ	10YR2/1 黒色	口縁に一条の沈線
6	溝 046	黒色土器	椀	-	[2.0]	8.4	ヨコナデ、 オサエ後ナ デ	ナデ、ミガ キ	10YR7/6 明黄褐色	
7	溝 046	灰釉陶器	短頸壺	(6.8)	[3.6]	-	ロクロナデ、 施釉	ロクロナデ	5Y4/4 暗オリーブ色	
8	溝 046	須恵器	鉢	-	[6.3]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	N6/ 灰色	
9	溝 046	須恵器	小瓶	-	[3.2]	(4.0)	ロクロナデ、 回転糸切り 痕	ロクロナデ	N6/ 灰色	
10	溝 001	土師器	皿	-	[2.2]	-	ヨコナデ、 オサエ	ヨコナデ	10YR6/3 にぶい黄橙色	
11	溝 001	土師器	皿	-	[2.4]	-	ヨコナデ、 オサエ	ヨコナデ	7.5YR6/3 にぶい褐色	
12	溝 001	黒色土器	椀	-	[1.9]	(8.0)	ナデ、貼り 付け高台	ケズリ、ナ デ、ヘラミ ガキ	5YR7/6 橙色	内面摩滅著しい
13	溝 001	黒色土器	甕	13.2	[4.2]	-	ヨコナデ、 オサエ後ナ デ	ヨコナデ、 オサエ後ナ デ	5YR1.7/1 黒色	
14	溝 001	緑釉陶器	椀	-	[1.9]	(6.6)	ロクロナデ、 ヘラケズリ、 施釉	ロクロナデ、 施釉	10Y7/2 灰白色	
15	溝 001	緑釉陶器	椀	-	[1.75]	5.8	ロクロナデ	ロクロナデ、 施釉	2.5Y8/2 灰白色	外面は摩滅で釉が剥離
16	溝 001	白色土器ま たは 緑釉陶器	皿	(15.2)	2.3	6.7	ナデ、オサ エ後ナデ、 ロクロヘラ ケズリ	ロクロナデ	10YR8/2 灰白色	
17	溝 001	灰釉陶器	椀	-	[5.1]	-	ロクロナデ、 施釉	ロクロナデ、 施釉	N8/ 灰白色	輪花椀
18	溝 001	灰釉陶器	椀	-	[2.0]	(8.6)	ロクロナデ	ロクロナデ、 ナデ、施釉	5Y8/3 浅黄色	
19	溝 001	須恵器	椀	-	[2.6]	(6.8)	ロクロナデ、 ヘラケズリ	ロクロナデ	5BG6/1 青灰色	
20	溝 125	土師器	皿	(10.8)	[1.7]	-	ヨコナデ、 オサエ後ナ デ	ヨコナデ、 オサエ後ナ デ	10YR7/3 にぶい黄橙色	
21	溝 125	土師器	甕	(19.2)	[4.3]	-	ヨコナデ、 ナデ	ヨコナデ	7.5YR5/4 にぶい褐色	外面全体に煤付着
22	溝 125	緑釉陶器	皿	(13.0)	2.5	6.8	ロクロナデ、 施釉	ロクロナデ、 施釉	7.5Y6/3 オリーブ黄色	底部外面にひび割れあり
23	溝 125	灰釉陶器	椀	[2.4]	8.1	ロクロナデ	ロクロナデ	N8/ 灰白色	内外面に施釉あり	
24	溝 125	須恵器	鉢	(20.4)	[5.7]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	10Y7/1 灰色	
25	柱穴 034 (柱穴列1)	土師器	皿	16.4	[2.7]	-	ヨコナデ、 オサエ後ナ デ	ヨコナデ	10YR8/3 浅黄橙色	
26	柱穴 075 (柱穴列3)	須恵器	小瓶か	-	[3.0]	(5.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	5B7/1 明青灰色	
27	柱穴 060 (柱穴列3)	須恵器	椀	-	[3.1]	(7.8)	ロクロナデ	ロクロナデ	N7/ 灰白色	
28	柱穴 045 (柱穴3)	土師器	甕	(15.8)	[4.6]	-	ヨコナデ、 オサエ後ナ デ	ヨコナデ、 オサエ後ナ デ	7.5YR5/6 明褐色	
29	土坑 019	緑釉陶器	椀	-	[2.8]	(8.4)	ロクロナデ、 施釉	ロクロナデ、 施釉	7.5Y7/2 灰白色	
30	土坑 019	灰釉陶器	椀	16.0	4.4	6.5	施釉	施釉	2.5Y7/3 浅黄色	
31	土坑 020	須恵器	瓶	-	[2.8]	(7.6)	ロクロナデ、 貼付高台	ロクロナデ	5PB5/1 青灰色	底部にヘラ記号あり
32	土坑 053	白色土器	高坏	-	[14.0]	-	オサエ後ナ デ、ヘラケ ズリ	ヨコナデ	2.5Y8/2 灰白色	
33	土坑 054	土師器	皿	-	[2.4]	-	オサエ後ヨ コナデ、オ サエ後ナデ	オサエ後ヨ コナデ、オ サエ後ナデ	5YR 7/6 橙色	
34	土坑 054	緑釉陶器	椀	-	[1.3]	6.0	施釉	施釉	10YR8/3 浅黄橙	
35	土坑 054	緑釉陶器	椀	(18.2)	[6.1]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	5Y7/1 灰白色	
36	土坑 054	須恵器	坏蓋	-	[1.5]	16.0	ロクロナデ	ロクロナデ	N5/ 灰色	
37	土坑 054	須恵器	坏身	-	[2.7]	(7.9)	ロクロナデ	ロクロナデ	N7/ 灰白色	
38	土坑 054	須恵器	坏身	-	[5.9]	(11.8)	ロクロナデ	ロクロナデ、 ナデ	10BG6/1 青灰色	

遺物 番号	遺構	器種	器形	法量 (cm)			調整・成型		色調	備考
				口径	器高	底径	外面	内面		
39	土坑 054	須恵器	鉢	-	[7.4]	10.7	ロクロナデ、 オサエ	ロクロナデ	10Y7/1 灰色	
40	土坑 054	須恵器	小瓶	-	[4.0]	3.8	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y5/2 暗灰黄色	
41	土坑 054	須恵器	甕	-	[5.8]	-	タタキ	青海波状文、 ナデ	2.5Y4/1 黄灰色	
42	土坑 058	緑釉陶器	椀	-	[2.8]	(7.0)	ロクロナデ、 施釉	ロクロナデ、 施釉	7.5GY6/1 緑灰色	
43	土坑 058	緑釉陶器	椀	-	[2.7]	9.4	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y7/2 灰黄色	
44	土坑 058	緑釉陶器	皿	(15.6)	3.4	(7.9)	ロクロナデ、 施釉	ロクロナデ、 施釉	7.5YR7/6 橙色	
45	ピット 003	土師器	皿	-	3.1	-	ヨコナデ、 オサエ後ナ デ	ヨコナデ	10YR8/2 灰白色	
46	ピット 003	緑釉陶器	椀	-	[1.4]	(6.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	10Y4/2 オリーブ灰色	
47	ピット 006	緑釉陶器	椀	(13.0)	[2.9]	-	ロクロナデ、 施釉	ロクロナデ、 施釉	7.5Y6/2 灰オリーブ色	
48	ピット 006	須恵器	鉢	(24.0)	[2.75]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5Y6/1 灰色	
49	ピット 021	須恵器	坏身	-	[1.5]	(7.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	7.5Y6/1 灰色	
50	ピット 037	緑釉陶器	皿	-	[2.6]	(8.0)	ロクロナデ、 施釉、削り 出し高台	ロクロナデ、 施釉	7.5Y7/2 灰白色	
51	ピット 042	灰釉陶器	椀	-	[3.0]	7.6	ロクロナデ、 下半ヘラケ ズリ	ロクロナデ、 施釉	7.5Y8/1 灰白色	
52	ピット 120	須恵器	坏蓋	14.2	[1.7]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	2.5Y7/1 灰白色	
53	南壁 2層	瓦質土器	鍋	(23.0)	[2.8]	-	ヨコナデ、 オサエ後ナ デ	ヨコナデ	2.5Y6/2 灰黄色	
54	南壁 5層	黒色土器	椀	(16.0)	[4.8]	-	ヨコナデ、 オサエ後ナ デ	ミガキ	N1.5/ 黒色	
55	南壁 5層	緑釉陶器	椀	-	[3.15]	(7.5)	ロクロナデ、 施釉、回転 糸切り痕	ロクロナデ、 施釉	7.5Y4/3 暗オリーブ色	
56	南壁 5層	弥生土器	鉢	(16.7)	[3.6]	-	ロクロナデ	ロクロナデ	5YR6/4 にぶい橙色	中期 N 様式か?
57	包含層	土師器	皿	(12.0)	1.3	-	ヨコナデ	ヨコナデ	10YR8/2 灰白色・ 10YR6/3 にぶい黄橙色	
58	包含層	土師器	甕	(17.2)	[5.3]	-	ヨコナデ、 オサエ後ナ デ	ヨコナデ	10YR6/4 にぶい黄橙色	
59	包含層	灰釉陶器	椀	-	[2.0]	(7.6)	ロクロナデ、 施釉	ロクロナデ、 施釉	7.5Y7/1 灰白色	
60	包含層	須恵器	鉢	(20.4)	7.4	(9.0)	ロクロナデ、 回転糸切り 痕	ロクロナデ	N7/ 灰白色	
61	溝 046 上層	瓦	丸瓦	長さ： [12.8]	幅：[8.5]	厚さ：2.0	凸面：縄目 痕、ナデつ け	凹面：布目 痕	2.5GY8/1 灰白色	
62	溝 046 下層	瓦	平瓦	長さ： [18.0]	幅： [20.2]	厚さ：2.2	凹面：布目 痕	凸面：縄目 痕	10YR8/2 灰白色	
63	溝 125	瓦	平瓦	長さ： [13.7]	幅：[7.5]	厚さ：1.9	凹面：布目 痕	凸面：縄目 痕	N6/ 灰色	
64	溝 125	瓦	平瓦	長さ： [11.8]	幅： [11.7]	厚さ：2.0	凹面：布目 痕	凸面：縄目 痕	N6/ 灰色	
65	ピット 075	瓦	平瓦	長さ： [15.5]	幅： [13.0]	厚さ：3.0	凹面：布目 痕	凸面：縄目 痕	5Y6/1 灰色	
66	溝 001	石製品	砥石	長さ： [7.4]	幅：[4.9]	高さ： [2.6]	-	-	10YR8/3 浅黄橙	
67	ピット 059	石製模造品	滑石勾玉	長さ：2.0	幅：3.4	厚さ： 0.35	-	-	5GY4/1 暗オリーブ色	

写 真 图 版



1. 調査区全景（北から）



2. 南北ピット群（写真中央）完掘状況（北から） このピット群から柱穴列1～4を検出した。



1. 溝 001、046、125 完掘状況（北から）



2. 土坑 019 完掘（東から）



3. 土坑 020 完掘（北から）



4. 土坑 053 完掘（西から）



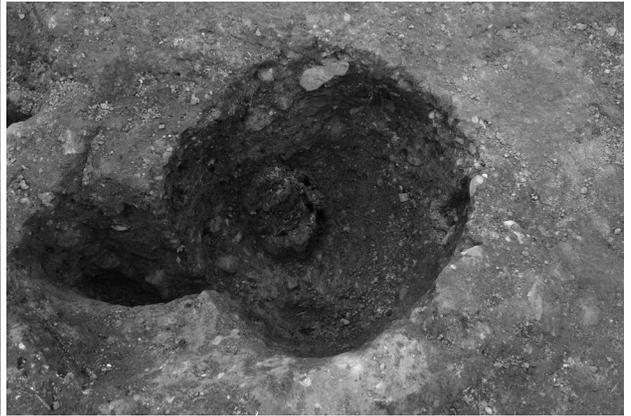
5. 土坑 055 礫・板材検出状況（西から）



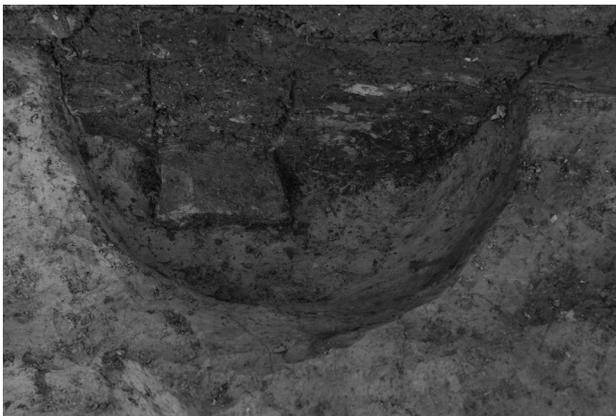
1. 土坑 054 完掘 (南から)



2. 土坑 054 土層断面 (東から)



3. 柱穴列 3、柱穴 060 柱根検出 (東から)



4. 柱穴列 3、柱穴 075 礎板瓦検出 (北から)



5. 柱穴列 5、柱穴 013 柱根検出 (東から)



6. 柱穴列 5、柱穴 067 柱根検出 (東から)



7. 柱穴列 5、柱穴 135 柱根検出 (北から)



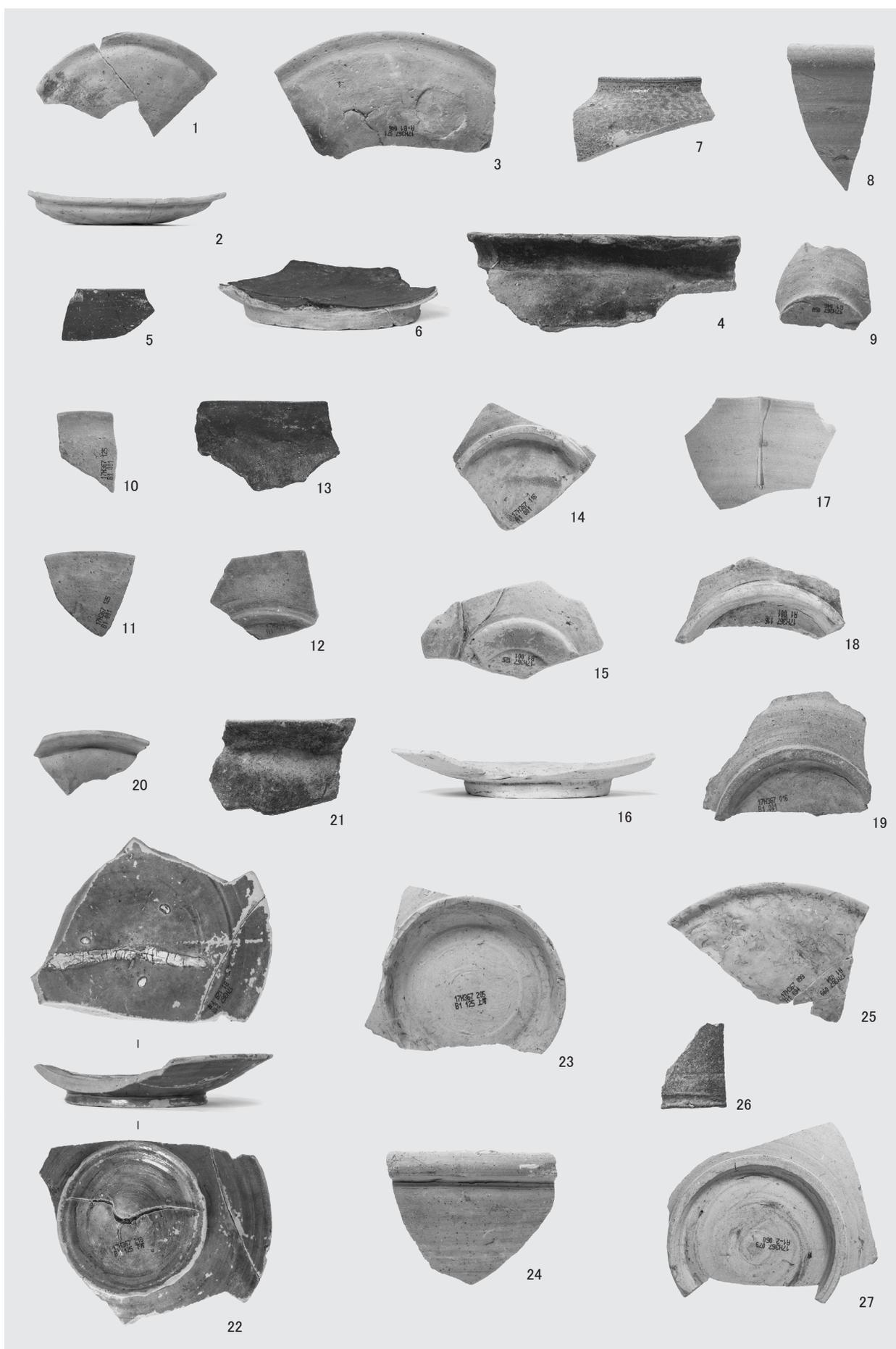
1. 南壁土層（北から）



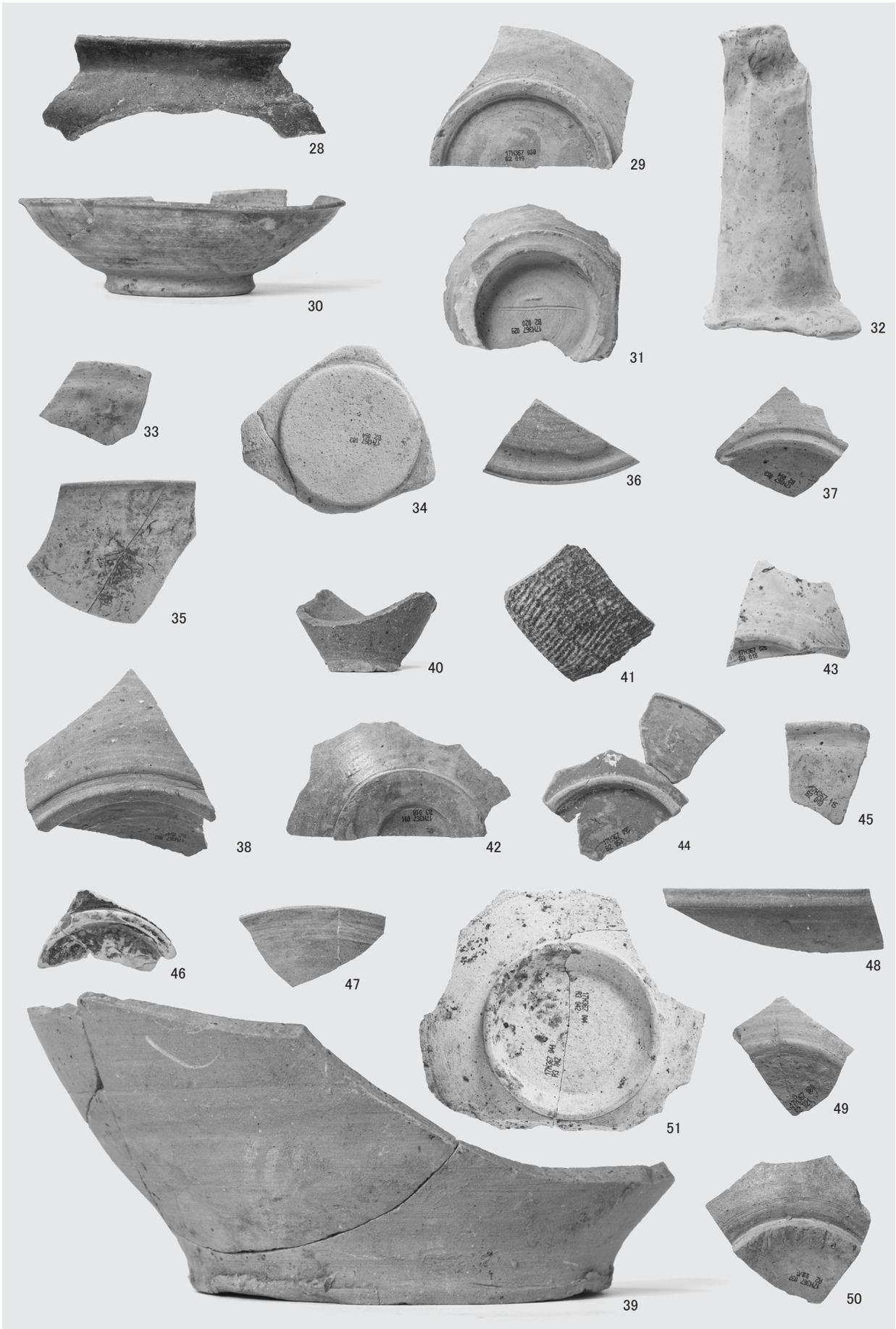
2. 東壁土層（西から）



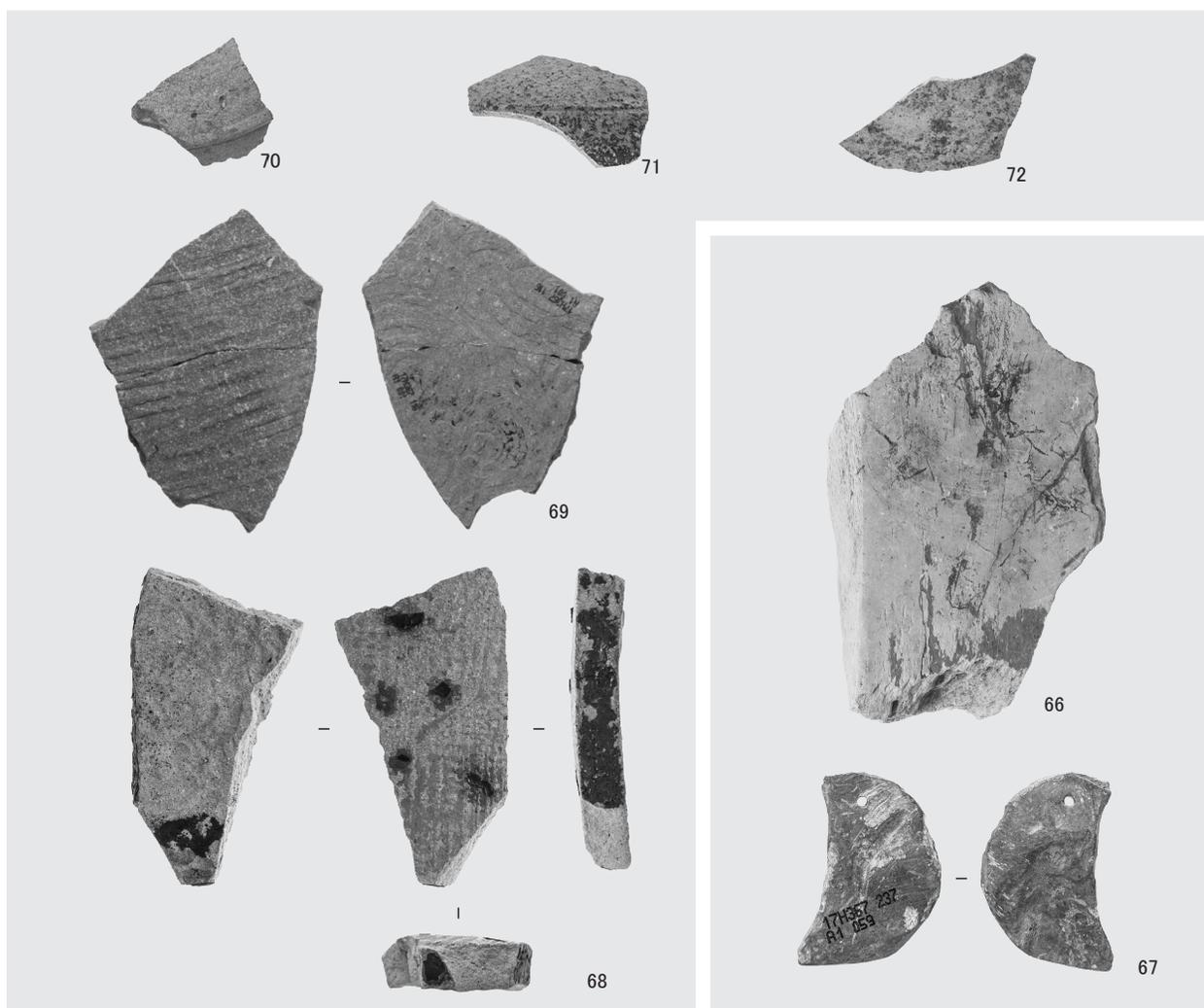
3. 北壁土層（南から）



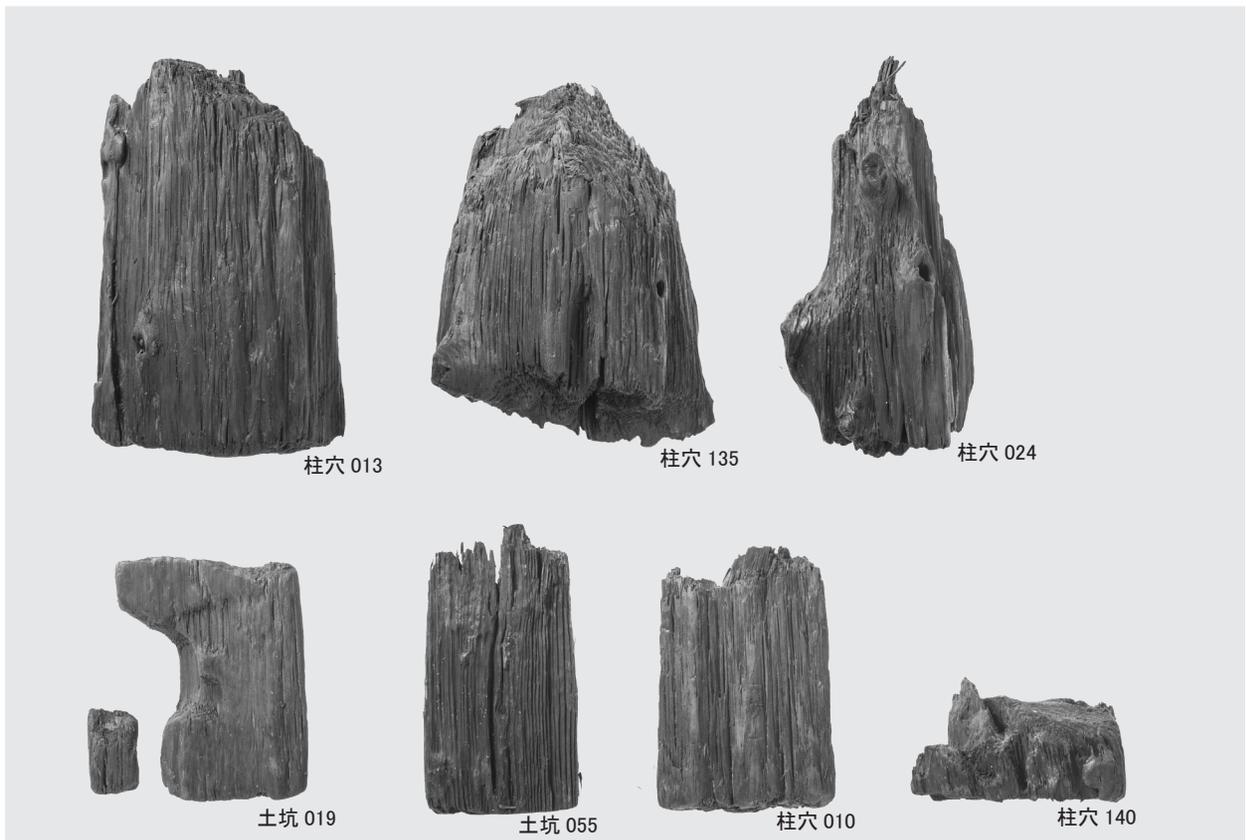
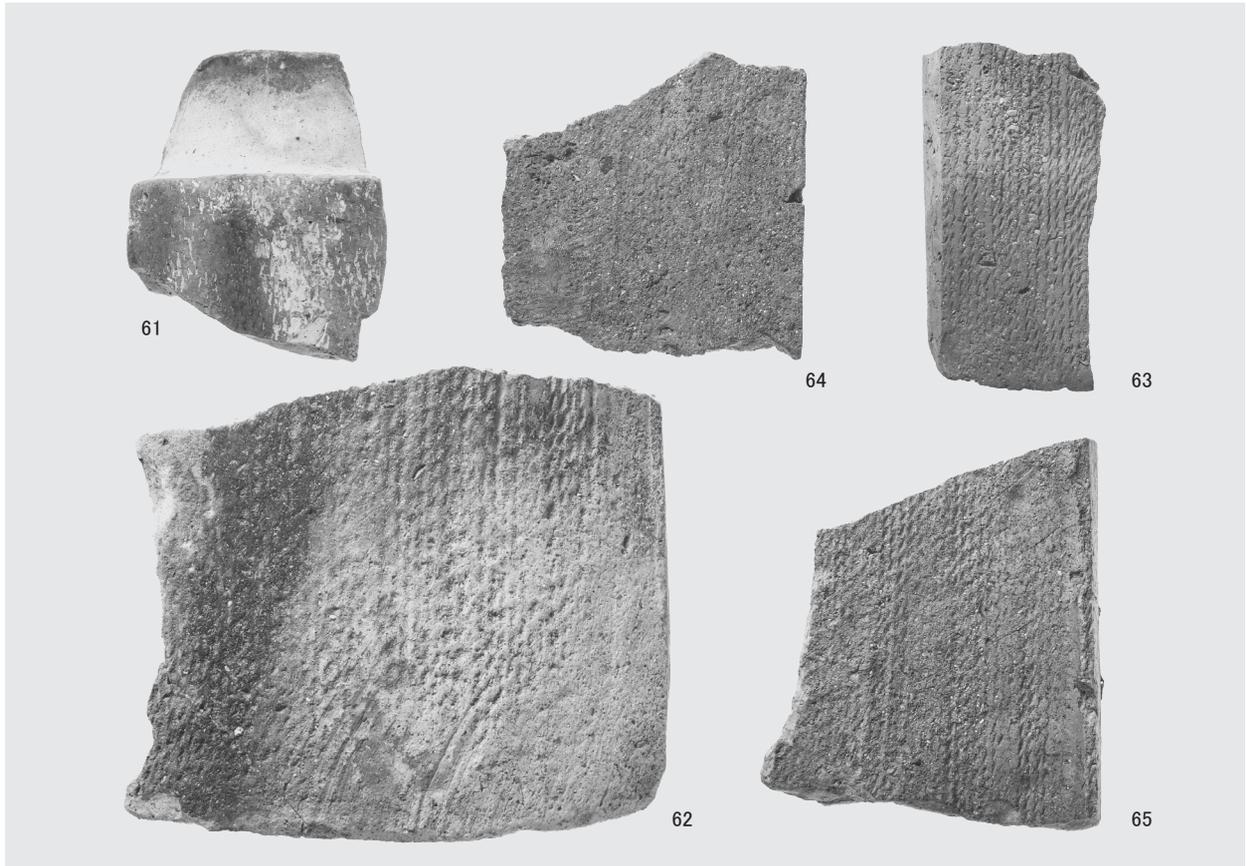
出土遺物 1



出土遺物 2



出土遺物 3



出土遺物 4

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうしじょうにぼういっちょうあと
書名	平安京右京四条二坊一町跡
副書名	壬生上大竹町における埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	イビソク京都市内遺跡調査報告
シリーズ番号	第20輯
編著者名	熊谷洋一、小池智美
編集機関	株式会社イビソク
所在地	〒612-8425 京都府京都市伏見区竹田田中殿町86番地 TEL 075-632-8109
発行年月日	2018年8月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょううきょうしじょう 平安京右京四条 にぼういっちょうあと 二坊一町跡	きょうとしななきょうく 京都市中京区 みぶかみおたけちやう 壬生上大竹町 14番1・3・ 4	26106	1	35° 00' 28"	135° 44' 04"	20180129) 20180226	105 m ²	集合住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
平安京右京四条 二坊一町跡	都城	平安時代前期	溝・柱穴列・土坑・ ピット	土師器、須恵器、灰釉陶 器、緑釉陶器、瓦質土器、 黒色土器、瓦	
要約	調査地は、西靱負小路東側側溝と思われる溝を3条検出した。このうち最も東の溝は砂礫によって埋没していた。また、その東側では築地芯推定線にのる柱穴列を検出した。この他に東四行北三門・四門の境界推定線と平行する柱穴列を検出した。				

平安京右京四条二坊一町跡

—壬生上大竹町における埋蔵文化財発掘調査報告書—

発行日 2018年8月

編集
発行 株式会社イビソク

住所 京都府京都市伏見区竹田田中殿町8番地
〒612-8425 TEL 075-632-8109

印刷 富士出版印刷株式会社

